



圓光大師行狀圖

第七八九十、十一、十二、十三、十四

共十



圓光大師行狀畫圖翼贊卷七

事義

傳本第七



上人をも諸宗の教門にあきつゝのれるれそあるは
 修初おろくそれ證をほ給ま。そのま西明黒谷ありそ。
 法華三昧紙をさるひ紙とて。普賢白象よのりて。
 かのあり道場り現したる。又上人ある時敷空上
 人ありひは西仙房と。ともよをこけいふまひをりて。山
 王新向して。納交のころ紙ありり給たり。これ未代
 の奇特あり

○普賢白象ニノリテ現シ給フヲ九卷傳ニ。上人ヒトリ是ヲ拜ス。餘

○敷空上人
 第三卷二見
 たり
 ○西仙房第
 四十三卷二
 見たり

志種也。天聽
奇悟事不再
告。在乳舖之
中。聞諸梵志
誦四圍陀典
各四万偈。傷
有三十二字
皆諷其文。而
領其義弱冠
馳名。獨步諸
國。出家誦三
藏盡。更求異
經。於閻浮提
中。遍求不得。
即入龍宮。既
得諸經。於南
天竺。大弘佛
弘。摧伏外道。
○覺賢三藏
梁高僧傳云。
京師道場寺
佛馱跋地羅

此云覺賢姓
釋氏。迦維羅
衛人。甘露飯
王之苗裔也。
義熙十四年
吳郡內史孟
顛。右衛將軍
褚叔度。請師
為譯主。與沙
門法業。慧義
慧嚴。慧觀等。
為筆授譯。嚴
成六十卷。有
二青衣。且從
池出。灑掃研
墨。
○揚州謝司
空寺。後故
為興嚴寺。ト
華嚴感應傳
二見エタリ。護
淨華嚴法堂。

覺賢三藏震旦より。安帝義熙十四年三月十日
より。揚州謝司空寺。護淨華嚴法堂をこころ。華
嚴經を譯し給ひ。此堂のまへに蓮花池あり。毎日
青衣ある二人の童子あり。こころいそぢり。或は
とこぼり。とこぼり。けの夜へなぐり入る。唯此譯
し。をいそぢのち。えんば。たりにたり。此經いそく
就まよありしゆ。妙神やまじく。後をくく
侍まふ。と。と人の技術やまじく。龍神を
感ぎ。久あまひる。ゆし。と。侍まふ。

畫圖

○出文机唐韵ニ。机案屬也。玉篇ニ。案几屬也。和名ニ。書案俗云不美都
久惠ト。文机書案同物ニテ。書物ヲ置机ナリ。出文机ハ或云今俗ノ

ツケ書院ノ事ヲイヘリ。是高サ八寸机ノ寸方ニテ。間ニ。左右ニ筆廻ヲ
設タルモアリト。畫圖ノ中ニ。上人書ヲ披テ見給フヲ圖シケルニ付。
書院ノ明障子ノ下ニ書ヲサレシキテ見給ヘルヲ繪カキタル處モア
リ。長明カ方丈記ニ。東ノ垣ニ窓ヲアケテ。爰ニフツクエヲ作り出せリト
アリ。又禪林小歌。丁ニ。置書棚机トアルニ。棚机ヲダシツクエト訓タリ。
明障子トハ常ノウス紙ニテ張タルヲ云ナリ。只障子ト云トキハ。ツク板
戸ヲモ障子ト云ナリ。間ヲ隔テ。往來ヲ遮ルノ義ナリト。和名鈔云。
漢語鈔云。障子屏風之屬也。○コノ經龍樹菩薩龍宮ヨリカヘリテヒ
ロメ給シコト大概龍樹ノ本傳ニ見エタリ。華嚴疏云。佛滅度後六百年
龍樹菩薩入龍宮見華嚴大經凡有二本。上中二本。非凡カ所持
逐誦出下本。流於天竺。此土晉譯成六十卷。唐譯成八十卷。然於
下本四十八品止有。三十九品。餘九品未至此。土行願品疏鈔序
云。續得烏荼國所貢。後分般若三藏。同清涼國師再譯成四十卷。
其臨末一卷。即今大願主是也。乃晉唐二大部中。所缺然具攝全
經綱領。故清涼於大疏鈔外。已爲十卷。疏疏此後譯。而復更作別
行疏。疏此一卷。圭峰作鈔釋之。最爲詳盡。○覺賢三藏翻譯ノコト
委久梁高僧傳第二卷ニアリ。此三藏廬山十八賢ノ隨上ニテオハセシカ。義
熙十四年。二十華嚴ヲ翻譯シ給ヘリ。此時カ、ル不思議ノ事トモノ

外四面四苑
莊嚴是彼諸
天共遊戲處
一車衆苑二
鹿惡苑三雜
林苑四喜林
苑秘妙境界
並集此苑觀
此無厭名喜
林也起世經
有大園林名
曰歡喜周廻
一千廿句

須々米。又云。雀有黃雀青雀白雀大雀等之名。所出未詳。且今俗
所稱者。雀之有毛冠也。疑異國之鳥獸歟。歡喜苑ノ事。寺院ノ中。附
ス。今昔物語第七云。今昔震旦ノ齊ノ代ニ武當山ト云フ所ニ慧表比丘
ト云比丘住ケリ。勲ニ佛ノ道ヲ求メンカ為ニ。建元三年ト云年。嶺南
至テ廣州ノ朝亭寺ニシテ。中天竺ヨリ渡レル。沙門曇摩伽陀耶舍
ニ值テ。無量義經ヲ傳ヘムト思フ。心ヲ至シテ。此ヲ請スルニ。纔ニ一本ヲ
得タリ。即チ武當山ニ。此經ヲ持至テ。此經ヲ受持ス。其後永明三年ト
云年ノ九月ノ十八日。慧表此經ヲ頂テ。山ヲ出テ世ニ弘メムトス。山ノ中
ニ宿セルニ。初夜ノ程ニ。忽ニ一人ノ天人。慧表ノ所ニ來レリ。百千ノ天衆ヲ
隨テ。眷屬トシテ。此無量義經。及ヒ慧表比丘ヲ供養ス。慧表天ニ問
テ云ク。此レ誰ノ天ノ何ノ故有テ來レルソト。天人答テ云ク。我等ハ此
武當山ニ有シ青雀ナリ。集ニリ聚テ。比丘ノ無量義經ヲ講シ給ヒ
シヲ聞シニ依テ。命終シテ忉利天ニ生セリ。我等其ノ恩ヲ報セム
ト思フニ依テ。來テ經及師ヲ供養スル也。我等カ本身ハ彼ノ山ノ西南
ノ陽ニ有リ。一所ニ集ニリ集テ。皆身ヲ捨タリト。此事ヲ語り畢テ。忽
ニ失セヌ。慧表此事ヲ聞テ。使ヲ彼山ニ遣テ見セシムルニ。多クノ青雀。教
フル所ニ死テ
皆有リ。云云

上人秘密の窓より。觀念の原より。路あり。あると
たい蓮華あり。つぎあると。ハ羯磨をえ。あると。ハ寶
珠を拜て。觀心明了あり。瑞相を眼前より。あはし。路と
おやうり。あり

畫圖

○秘密ノ窓觀念ノ床ニテ行者ノ所居ヲ云ナリ。○羯磨金剛者
橫堅三股杵是故號云十字金剛謂橫擊堅突之標相也此乃金
剛之作業故表本具作業智也大日經疏云梵云羯磨金剛謂
所作事業也金剛頂義決云爐内作羯磨印相謂三股十字形

上人ある夜夏るく。一丈大山あり。それ峯さへあてた
し。南に長遠あり。西方より。ひるり。山はわきに大河
あり。波水あり。おろく。波浪南なる。河原砂とろく

色深く。林樹荒く。と。限敷を志す。深山の腋の
やうく。家不西方。故尺路。地より。のこ五丈。なり
あぶら。く。中よ。一聚の紫雲。有り。され雲。び。き。り
く。上人の。と。好。よ。い。法。希有の思。法。あり。法。と。あり。
これ紫雲の中より。世重。光を。み。光の中より。孔雀
鸚鵡等。れ。百寶色の鳥。び。いで。く。よ。も。散。又。河漢
持。我。と。身。より。光を。し。あら。く。照耀。き。ま。り。なり。其
は。光。多。び。の。なり。く。も。と。れ。く。紫雲。れ。あ。ふ。り
ぬ。この紫雲。ま。あ。ふ。じ。く。く。止。河を。く。き。り。が。く。に
往生人。ある。が。息。惟。一。法。なり。又。須臾。よ。り。ま。り
り。く。上人の。ま。は。位。と。や。う。な。く。ひ。る。り。く。一。天下

○畫工乘臺
未考當麻本
附異本云乘
基

霞。小雲の中より。一人の僧。お。く。上人の。あ。ま。き。り。位
に。それ。さ。は。腰。より。下。金色。り。て。く。より。の。は
雲深。なり。上人合掌。位。頭。志。く。申。法。く。我。誰。人。よ
ま。は。と。と。や。と。僧。答。法。く。あ。い。是。善導。あり。と。た。ま
れ。と。あり。本。法。と。や。と。申。法。小。汝。專。念。佛。を。ひ。ろ。じ。る
と。貴。が。ゆ。へ。よ。ま。き。り。さ。る。なり。との。法。と。思。く。愛。あ
ぬ。畫。工。乘。臺。り。お。け。き。て。ゆ。先。に。思。く。と。法。を。圖。を
ひ。せ。り。小。流。布。して。善。乃。善導。とい。へ。く。我。あり。そ
の。面。像。の。ち。に。唐朝。より。や。り。れる。新。像。な。い。ざ。り。あり
上人の。化。導。和。尚。乃。尊。意。よ。か。る。へ。る。し。あ。ま。ら。を。し。
志。く。上人の。勸。進。ふ。り。く。称。名。念。佛。を。信。し。往生

城とて家とて一列もあら。四海よあまのひ一前兆の
ひあつらひる。あまのひの伝をせしむる事

畫圖

○第十一卷二。建久八年五月一日ト云一書二。治承四年四月七日ノ
夜ト。十卷傳ニ安元元年二月十四日ノ夜ト。選擇之傳ニ八。承安五年
上。建久八年ト。兩度之夢ト云。祕傳抄ニ八年月ヲ載ス。有時上人白
地ニ西戸ニ出給時親リ善導ニ逢給ト云。拾遺語燈錄上卷御夢
記ニ八。建久九年五月二日注之ト。劉休玄ガ擬古詩ニ。眺々。陵長
道遙々。行遠之。謝觀力曉賦ニ。邊城之牧馬。頻嘶。平沙渺々。注ニ善曰。
楚辭曰。路渺々之。默々。廣雅曰。渺々。遠也。○茫々。廣大。良文選ノ古
詩ニ。迴車駕。言邁悠々。波長道。四顧何茫々。東風搖百草。白氏文
集。續古詩ニ。茫々。綠野中。○一聚八ヒトムラナリ。○唐朝ヨリワタレル影
像トハ。重源將來ノ像ヲ指スナリ。○前兆ハ。先夕チテ。奇瑞アルヲ云
見エタリ。周禮ニ。夢者事之祥也。云云

上人專修正行せんしゆせいぎやうとて城しろをまもりして一心專念いっしんせんねん切きはきり給し

うはわの口稱三昧を發し給き。生年六十六。建久九
年正月七日。別時念佛のあひじり。めてハ。まづ明相
あふれ。次よ水想。氣現一のち。に瑠璃地をうた
現前も。同二月。寶地寶池寶樓を見。あまのよを
玉のち連こみ。務相あり。或時。友の眼より。光哉。あは
眼よ。瑠璃あり。うら。瑠璃のは。不れ。し。は。わ。に。あ
ら。花あり。寶瓶。れ。し。或時。は。も。家。に。西。方。を。見
やり。給。よ。寶樹。は。あり。て。さ。下。心。り。志。了。さ。ひ。或。時。の
座下寶地となり。或時。佛。に。西。像。現。或。時。の。三。尊
大身を現。或時。勢。至。來。現。給。す。か。ら。畫。工。り
命。し。て。こ。れ。を。う。り。し。さ。る。家。或。時。の。寶。鳥。琴

苗等此種之乃之をさくくうまじひの自筆此三
昧發得の記よりへんゆり此記と人存日此あひ
披露の勢觀房迹を相承のちこれを披露
きれりる跡の明遍僧部へ此記をひき見
く隨處の派をあるれちりてなり

畫圖

○拾遺語燈錄上云三昧發得記初生長承二年癸丑至建久建
久九年正月初朔赴山桃法橋教慶之請歸庵之後未刻始恒例
正月一七箇日別時念佛初日明相現時仰望東天光明甚耀於
尋常第二日水想觀自然成就之自此而後地想觀之中瑠璃地
相得少分現至第六日後夜現瑠璃地及官殿相二月四日早晨
瑠璃地現其相分明同月七日亦現瑠璃地上種種官殿相凡自
正月朔月至二月初七三十七箇日日課念佛七萬遍不退勤修
水想地想寶樹寶池寶樓五觀皆得顯現自二月二十五日明處

開目眼根出生赤囊相亦見瑠璃壺相尔前閉目見相開眼即失
今閉目見之同月二十八日依病且減念佛員一萬二萬任意勤
修其後右眼現光明相照曜明朗光端青色亦觀瑠璃相其貌如
壺而有赤華狀似寶瓶又日沒黃昏出望四方各方有赤青色寶
樹高下無準定或四五丈或二三十丈光彩宛轉如經中說同年
八月病勞平復始自初朔日課念佛六萬遍如本勤行同二日座
下四方一步計變青瑠璃地同年九月二十二日早晨瑠璃地相
影現分明周圍七八步朗然映徹如瑠璃鏡同二十三日後夜并
曉又分明顯現案地觀文為未來世一切大衆欲脫苦者說是觀
地法若觀是地者除八十億劫生死之罪捨身他世必生淨國心
得無疑云釋曰願行之業已圓命盡無疑不往依經及釋文往生
無疑正治二年二月之頃地想等五觀任運現之建仁元年二月
八日後夜聞衆鳥音并笳笛等音其後隨日自在聞笙笛種種樂
音同二年正月五日佛殿裡勢至像之背後現彼菩薩丈六面三
度又現丈六真身憶此彼菩薩因地以念佛三昧既入無生忍故
今為念佛者示現其身不可疑之同十二月二十八日午刻高島
少將來訪謁於佛殿裡法話之間念佛如常見佛像背後現阿弥
陀佛丈六身面隔于障楮透徹無碍少時隱沒也元久三年正月

勤修恒例七日念佛四日念佛之間阿弥陀佛觀音勢至三尊共
現大身又五日現如前矣源空自筆記之。○勢觀房遺跡相承第
四十五卷云道具本尊房舍聖教ノコル所ナクコレヲ相承セラレキト
云

圓光大師行狀畫圖翼贊卷八

事義

傳本第八



上人三昧發得此のち暗夜り燈燭の心といふも。
眼より光輝らむらして聖教をひきた室の内外を見
流し法蓮房もそのありしを拜し隆寛律師之
こには事感信仰きし我々のある時秉燭の福よ上人
のまに聖教を披讀し流しをその志を我れ正信房
のまに燈明をともすもいふとそ。見えざりはくはとが
がつかれてひそかに座下を伺ふた乃以目けをそ
よの光をえむらして交の面紙して見流しの光れ

○隆寛律師
第四十四卷
二見エタリ

○正信房
第四十三卷
二見エタリ

出家貞觀三
年秋八月行
西域遊歷諸
國名山聖跡
無不履之衆
教與旨無不
窮之貞觀十
九年春正月
歸朝入西京
三月居長安
弘福寺夏六
月與沙門靈
潤等十二人
翻譯大小經
論七十四部
一千三百三
十五卷麟德
元年二月已

證ト云又律分^四ノ中ニ若聖法ヲ得タルヲ人ニ對シテ説ク一ノ制戒ト立ラレ
○ヌキアシトハ源氏ニ我トシラレシトヌキアシニアユニノキ給フ未摘抄ニ俗
ニサレアシトテト云ニ同シ詩ノ正月ニ高天原厚地踏字彙ニ踏ハ小歩也
ト○更ハフルトヨムタケハ關ノ字ナリ一夜ヲ分テ五トスサレハ初夜ヲ初更
ト云ハ半夜ヲ三更ト云ハ後夜ヲ五更ト云時節ヲフルハニ夜ノフルヲ
更タケタリト云ナリ顏氏家訓ニ委曲辨之曰漢魏以來謂為甲夜
乙夜丙夜丁夜戊夜又云鼓一鼓二鼓三鼓四鼓五鼓亦云一更
二更三更四更五更皆以五為節西都賦亦云假令正月建寅斗
柄夕指寅曉則指午矣寅至午凡歷五辰冬夏之月雖復長短參
差然辰間遼闊盈不至六縮不至四進退常在五者間更歷也經
也○淡窓公上人ノ所居ヲ云長恨歌ニ養在深閨人不識○心ツキナ
クトハ源氏ニイト心ツキナクカノ君ハオホシケリ模抄ニ氣ノツカストナリ
遊仙窟ニ關情ヲコノロツキト誦リ○ハヤシテハハヤウシテナリ○玄井ニ
藏造高樓自居第一重今思居最下重恩夜書物自筆端放光井
見下重光明怪之近見從恩口出也從此恩為上足云已上聖關
所出經抄第五二樓楊ノ慈恩傳ト云唐高僧釋惠沼傳云攻堅于經論
善達翻傳自井三藏到京恆窺壺奧後親大乘基師更加精博後
著諸疏義號溜州沼也○佛教ニハ天竺摩訶訶陀國ヲ中國トシ大唐

我朝ヲ邊國ト云儒教ニハ唐土ヲ中國ト云又神道ニハ唐土天竺ヲ邊國
ノ夷ト云吾朝ヲハ中國舊史ニ云日枝山ノ日本ナト云ヘリ今此ニハ唐土
ハ大國日本ハ小國ナレハ只ナニトナク邊州トハ云ナリ是偏ニ上人ノ徳ヲア
ゲントノ詞ナルヘシ神皇正統記云異國ニハ此國ヲ東夷トス此國ヨリハ
又彼國ヲモ西蕃トイハルト

あると此上人念佛まゝわたりまゝに勢至菩薩來現
一法小童ありきりそのまげ一丈餘あり畫工よ命
まぐろ相をうつしを然るにめぐむとあふさ申
されきり

畫圖

上人あうまゆよ孝房をもちりてり法皇の
多に弥勒の三尊繪像よあは本像よあは地を
るれ板敷よも天井よもはりしり

其はい拜見し給ふ事はひびき事なりきり。

畫圖

○アカラサマトハ源氏ニサカラサマニ立出侍ニツケテ卷抄ニ左傳作謂林楚曰注暫也。木玄虚方海賦ニ暫ノ字ナリ。江文通カ上書ニ暫ノ字ヲ書タリ。又白地上モ書テカリソスト云心ナリ。○艸菴ハ出家ノ居所ヲ云。唐高僧道林傳云頭陀為業結艸為菴ト。○天井ノ字ハ出于風俗通藻井綺井天華板並同。凡ノ家居火難ヲ恐ル事ナレハ井筒ノ形ヲクミ上テ火ヲ除クトナリ。又中ニ水ヲコメタル心ヲモテ天井ト云也抄

○元久二年ハ土御門院即位七年乙丑歲也
○靈山寺ハ東山靈鷲山正

と久く小別時念佛を修し。不断の稱名法とし。元久二年正月一日より靈山寺より。三七日の別時念佛を修す。燈をくき。光明あり。佛を修す。勢至菩薩あり。く列したる。

法寺ノ別院云南ノ總門ノ右一町許ナリ。相傳傳教大師創ナリト

行々給々法蓮房を修す。と久く。上人。此の事を申し。ける事傳人と。吾給々人に。拜也。

畫圖

○不断トハ別時長時ニ通ストモ今ハ長時不退ヲ指シテ云ナリ。○元久二年正月一書ニ建久四年九月靈山平松ノ御坊ニ於テ。法皇御一周忌ノ為ニ七日別行アリト今一房ノ平松軒ト號スルハ此遺跡ナルニヤ此所昔ハ幽閑ノ地ニシテ天台ノ道場ナリシトノ事。寺院ノ中ニ見エタリ。大原問答縁起ニ建久三年於靈山寺三七日別時ト云云。其事今ト全同ニシテ。又餘ノ奇瑞等ヲ注セリ。○夢ノコトクニ拜ストハ御房ノ傳第四ニハノアタリ白毫ヲ拜ストアリ

同年四月五日。上人月臨殿。まじり給々。敷慰以法。候あり。退か。のど。禪向。を。と。よ。ら。ひ。き。お。り。さ。せ。給。々。と。念。を。礼。拜。し。ひ。ひ。を。地。は。は。も。く。る。く。ひ。さ。う。を。

○右京權太夫隆信入道、開院左大臣冬嗣公ヨリ十一代為經朝臣ノ子母ハ若狹守親忠ノ女也。歌入ニテ新古今以下ノ作者畫圖ノ名入リ

○本連房尋玄稱中納言阿闍梨日野中納言資長卿之孫山僧覺玄之真弟也

ありておきらせ給ふり。所派よむきびく仰られとい
 う。上人地をくらぬく虚空よきまをふこころるよ
 頭光現してお給はるをた。えむとやと右京権太夫
 入道法名戒心中納言阿闍梨房尋玄号本連房二人におよ供なる。
 二か見えしつまつご家より坂申池の橋をとりり
 給ひたりやむた。頭光現しるにふりて。此橋をば
 頭光代橋とぞ。申なるもやよま。此橋かたみき依りてありま
 こころほいよく佛のごさくりぞ。うやまひもて
 まつごき家

畫圖

○禪閣ハ關白ノ隱居ヲ太閤ト云法體ナレハ禪閣ト申トソノ御ヒタヒ
 ヲ地ニツケテトハ殿下ノ御威儀尋常何事ニカカラン實ニ御敬ノ至知
 スヘシ○頭光ノ橋今月輪殿ノ舊跡ヲ尋ヌルニ此橋ノ跡ヲ失ヘリ地理ノ
 部ニ見エタリ。今大師ノ影像ニ後ニ圓光御足ニ蓮華ヲ營造コト是ヨリ起
 レリトソ申侍ル

ある人不注上人の念珠を泣りりて。よ家ひる名号城と
 なふある時。あつたぬにぬけりまて。うけありを家
 小一室照曜。はる事ありたり。それ光越ぬじえ
 るよ上人恩賜の念珠よりいでありの珠。たに歴々
 たり。あなう暗夜より。星城なるのぶく。奇異の
 事たりといふなり

畫圖

○名字ハ實名ヲ云寛元ノ比今宮親王宣旨也。御名字久仁式部大
 輔為長撰申抄。俗ニ名告ト云是ナリ。○恩賜ハアハレミテ下ニ給ハル也
 ○歴々ハアキラカナル白ナリ。白氏文集三云。落盤珠歴々搖珮玉瑋
 瑋○奇異ハ世ノ常ニカハリテ不思議ナルヲ云。世説新語ニ陳羣為兒時

○勝法房種
姓等未考

祖父寔常奇異之上洛陽淨華院二珍藏之大師所持ノ念珠アリ其
記云。建保元酉年十二月十五日勢觀房源智上人。以大師所持
念珠賜和田義盛義盛上。建禮門院女院賜左京權太夫茂時茂
時傳大師門弟義阿義阿授武藏守泰時。泰時一曉入持佛堂見
所縣念珠放光明其光如星。又現無數化佛。因名星念珠。正元元
紀年四月十五日。依龜山法皇睿望上進。其後相繼。後圓融院後
小松院。稱光院。數代傳崇焉。稱光院崩御之時。賜當院第十世惠
照國師等熙和尚云云。此記文。傳々ノ後泰時光明ヲ拜見セラレト
今ハ上人恩賜ノ念珠トアレハ大師ヨリ直ニ賜リテ展轉ニアラス。然レハ淨
華院ノ念珠トハ又別ナルヘシサレハ大師ノ御念珠ノ光ヲ放チ給フ事唯一
ニノコニアラスト云事ヲ顯シトシテ彼記ヲコニ贅スルノコ

上人の弟子勝法房ハ捨をく仁ありまむ上人の真
影を畫せりまつりて其銘を二面呈志せり。上人
これを見給て。後二面紙たたの手にもち。右邊を
まへりをくねく頂の前後を見合らば。まへと後
は。胡粉をぬりて。なをうけ。きりぬくのち。こまて。似
し。これとて勝法房よたまひせり。銘乃る。い返答よを
よむまごりき。家を。勝法房。後日よ。又系て申あがり
き。地ん。上人のい。まへり。侍。分。紙。り。

我本因地 以念佛心 入無生忍
今於此界 攝念佛人 歸於淨土

十二月十一日 源空

勝法御房

とうきこ。授。此。も。ま。は。是。を。彼。の。心。小。押。と。改。致
し。たり。これ。ハ。首。楞。嚴。經。の。勢。至。乃。必。通。の。文。を。呈。上
人。の。勢。至。の。應。現。し。り。と。い。ふ。事。世。奉。こ。し。れ。を。稱。と。

○首楞嚴經
十卷唐天竺
沙門般刺密
帝譯也第五

志の深し。たゞこれ文の中。勢至乃法界を自贊
小用らば傳る。由らば奇特の事あり

○別紙ヲ用給フハ卑下シテ直ニ書給ハスナリ大抵カハル贊ナト直ニ書
ハ無禮ナリ。サレハ色紙形ナト設テツノ上ニ書事ナリトツ○勢至ノ御詞
首楞嚴經第五卷ニ出タリ

今彼真影を拜し。ひてまゝ。小胡粉を添ふ。なを
され。ゆゑ亦多し。これ末代の龜鏡ノ法より。故に自

筆の本紙寫す。此繪ノ加置と。詠あり。又或人上人の
真影を寫して其銘を申せり。此文を書て賜

らり。彼心本法。つら。い。ま。あり。此。あ。む。申。傳。る。又讚
列生福も。ふ。ま。ま。法。一。対。ハ。勢。至。菩。薩。の。像。を。自。作

して法然本地身。大勢至菩薩為度衆生故。顯置此
道場。筆置文。これ。裁。ら。ば。法。界。の。彼。配。取。の。卷。小。志。

此も也。勢至乃衆迹。ゆゑ衆との證據。これ。と。り。
尤。信。信。ま。り。や。此。里

畫圖

○今カノ真影ヲ拜シタテニツルトハ傳家在世ノ昔此真影何クニカ現
在ニシテ拜セラレケシ知カタシ○龜鏡ハ顔氏家訓ニ可為靈龜明鏡
祖庭事苑ニ龜所以決疑鏡所以辨物ト。龜ハ燒テ疑ヲ決シ鏡ハ照シテ
物ヲ明ムルナリ。サレハ後世ノ手本ニスルヲ末代ノ龜鏡トハ云也。劉黃策
集ニ上聖之龜鏡廣弘明集ニ後葉之龜鏡ト○御歸洛ノ時ノコニ置
レタル書ヲ置文ト云ナルヘシ。今泉州堺ノ長泉寺ニ珍藏スル置文ノ像是也
ト寺僧東鑑十九ニ陸奥國平泉ノ伽藍等ノ興隆ノ事故右幕下ノ御時
本願基衡等カ例ニ任セ沙汰スヘキノ旨御置文ニノコサルトアリ

諸人感夢此事。おほき。あ。り。に。或。人。い。上。人。蓮。花。の。な。り
わ。り。念。佛。一。法。と。思。ふ。或。人。い。天。童。上。人。を。圍。遶。ス。と。

○此繪トハ今
此傳本ノ所々
三圖ハ大師ノ
像ハ皆彼御自
筆ヲ本トシテ
加シテ也

○生福寺ノ讚
岐國那珂郡
小松莊弘法
大師建立觀
音靈驗ノ地
ナリ高松城下
ヨリ西南行程
七里ニヨリ

○置文ハ今世
俗ノ書置文也

後延喜載とて三條あり又洛中三本圖諍堅固あり
とてあま上人の位取ひたりと云あり。これすあいら念
佛するゆへと云ふ。あるは徳家の釈迦如来に奉ずの徳あり
當時法然房といふ人あり。ひまざる往生乃た妙あり
おやく此人をそのさちより生れしと信ふ家と
ある。此まじり上人勸化のうち都鄙小往生及び家人
おけし紫雲音楽。こにもあるか。こもまじりゆ。後
法をむあり。さあまを志ぬ。極楽よのまじりをか
まんとまが。たまり上人のなをへをあらが。さん

畫圖

○都鄙公京田舎ヲ云ナリ。潘安仁カ西征賦。熏灼四方。震耀都鄙。在
傳二都鄙有章。都公美也。揚升菴。曰。何以訓美。都者鄙對。鄙五百家也。稟

圓光大師行狀畫圖翼贊卷九

事義

傳本第九

上人道心うらに薰下。行業个にあつた家。上王公より下
黎元よりつるまで。これ徳よ歸を度といぬ。くたりの衆。
後白河法皇河東押小路の仙洞より。御如法經を修す。
治四年八月十四日。前方便をくつり。御經衆。法皇。
妙音院入道相國師長源空上人なまこ。門弟行賢大
徳山門より。良宴法印。行智律師。仙雲律師。覺兼阿闍
梨。重圓大徳。園城寺より。道顯僧都。真賢阿闍梨。玄修

○後白河法皇八人皇七十七代諱雅仁鳥羽院第四御子崇徳院同母弟也嘉應元年落飾御年四十三御法名行真
○河東押小路河東八賀



茂河ノ東云
ナリ。押小路

殿ハ本是鳥
羽院仙居高
松院御傳領
云云

○妙音院入
道相國ハ左

大臣頼長公
ノ男。源信
雅ノ女也。治

承元年三月

五日太政大

臣トナリ。三年

十二月十一

日。尾張國ニ

配流セル。出

家アテ法名

理覺ト号ス

○行賢大德

ハ鎮守府將

軍貞盛十七

代之後。玄番

允恒清六代

之孫。玄番元

行光之男。有

法印權大僧

都行賢又小

一條院五代

之後下。蘇守

有通之四男

有仁和寺法

橋行賢又左

京権太夫隆

信五代之孫

山僧性觀之

真菟有山法

印行快本号

行賢是皆上

人。有因縁未

知今之所指

在何也

○澄雲法印

座主記。往往

阿闍梨圓隆阿闍梨圓玄阿闍梨等

○上人道心ヨリ下イフコトナカリキト云。テ公結前生後ノ詞ナリ

○王ハ天子。公ハ三公。左右ノ大臣。大政大臣ヲ云。黎元ハ民ナリ。黎ハ黒

也。元ハ首也。民ノ首ニハ冠ツ着サル故ニ。髪アラハレテ。黒キヲ云ナリ。黔

首ト同シ。漢書。郊祀志ニ。大路所歷。黎元不知ト。○法皇トハ。佛道ニ入

給テ。法躰ニナリ給フヲ云ナリ。此號宇多天皇ヲ。寛平法皇ト申セシ

ヨリ始レリトシ。阿育王經。云ハ。萬四千塔。一時俱成。王起塔。已

守護佛法。時諸人民。謂為阿育法王ト。御位ヲオリ。并サセ給フ御

所ヲ。公院ノ御所又ハ仙洞ト申ナリ。御壽ヲ祝ヒ申セルトナリ。押小

路殿ハ事地理ニ見エタリ。彌世繼ニ。文永四年四月廿三日。院ノ上

城院。ハ又龜山殿ニテ。御如法經アソハス。女院モカ。セオハシメシケリ。

五月廿三日。十種供養ノ御經ニ部。浄土ノ三部經モカ。セ給ヘリ。

震殿ノ御シツラヒ。舞樂ノサカンナリシ。ヤン事ナキ御佛事ナリ

シト。又後白河院コソ。カ、ル御事ハセサセ給ヒケレ。ソレモ御グレオロシ

テ後ノ事ナリ。ムカシ上東門院モオコナハセ給ヒタリシタメシヤ。大

宮院オナシク書セオハシメストソウケ給ハルトアリ。續古今集。弘

長元年六月。龜山仙洞ニテ。如法寫經シ侍シ時。十種供養ノ散華

從一位貞子。調シテ奉リシ。ムスヒ花ニ。入道。前太政大臣。ムスヒヲク契

トナラハ法ノ花チリノ末ニテ數ニモラスナ。正ニク行法ニ入。前カタニ

後ノアレシ口トテ。様々ツトムルヲ。前方使トハ云ナリ

去十日。日吉乃社。臨幸あり。時衆徒執南澄雲法

印をきて。申入る。東寺僧。今度の御經衆小。入

らるべきより。それきこえあり。慈覺大師始行ハ法則

なり。他門の僧志る。海く。又或上人。入る。家。海く

り。風。海く。我いあがらに。子細を申。海く。云

こまよ。り。東寺僧。海く。社。上。人。勅喚あり。先達

海。先達を。海く。上。人。勅喚あり。先達

海。一。海く。上。人。勅喚あり。先達

海。一。海く。上。人。勅喚あり。先達

海。一。海く。上。人。勅喚あり。先達

海。一。海く。上。人。勅喚あり。先達

雖載其名未詳事實系圖

高市親王十五代之後

有山門阿波上座章尋之

真弟澄雲法印是宣陽門院及從二位

宋子教成之父也

○良宴法印帝王編年記

後菩提山權僧正月輪殿息建久二

年正月補一乘院門跡系圖信圓僧

正弟子大僧正良圓又有

寺阿闍梨良宴右中將忠

賴之息也

○行智律師開院冬嗣十

三代之孫繪所主殿首隆

能之男有繪師行知小一

條院四代之後大藏卿行

宗之十男有山少僧都行

知源賴光六代之孫佐渡

守行國之四男有寺律師

面乃東西一庭をまわく東の一庭より上人西の一庭より法

皇上人のつぎに入道相國より良宴法印以下官次

よまうせて列座と行基菩薩ハ世俗の法よりて婆

羅門僧正の志にもあらず此例にせざるハ良宴

法印上座たるべしといへども別勅あり上人一庭より著

て法上人禮盤よのがりて啓白其後錫杖を誦し

懺法をうぐむたまたま前方便の間毎日三時懺法あり

同廿日の後夜の時より正懺悔をうぐむ法後夜の

調聲ハ上人晨朝ハ調聲法皇法はくめあり堂莊

嚴美をばくし法又嚴重じり法皇御靈より事

ありゆらら子細御願文中納言兼光卿草乞よんえたり

○或山僧云衆徒大衆惣名也執當猶如知事亦名寺家執務小

門俗事及法會威儀並回文等事今附庸梶井宮見聞ニ貫首御

拜堂ノ時執當座主ノ系圖トハ古ノ鑰トシ座主ニ渡シ申ト

覺大師始行ノ法則ハ元亨釋書大師ノ傳ニ見エタリ天長十年ヨ

リ三年ヲ經テ承和ノ初ニ始行セラル事次下ニ注セリ水鏡下二ハ天長十年一書タ

ハワリ○或上人トハ山徒恐慮シテ直ニ名ヲ指テハイハ又詞ナリ正シク吾元祖大師ヲ指テ云ナリ○コレハアナカチニ子細ヲ申ヘカラストハ上人ハモト慈覺大師ノ門徒九代ノ嫡流ニシテ他門ノ僧ニハ同スヘカラストナリ○藤次ハ戒藤ノ次第ナリ凡戒藤夏藤ハ釋氏ノ法歳ナリ覽戒ヲ受テ以後ノ年勞次第ヲ云サレハ受戒以後年久シキヲ藤長ヌリナト云藤ハ年ト云字ノ意ナリ佛家ニハ俗姓ノ貴賤年歳ノ老少ヲイハス受戒ノ年藤ニ依テ坐次ヲ定ムルナリ近クハ梵網ノ章書ニ見エタリ一説ニ天竺ニ受戒ノ時藤ヲ以テ人形ヲ作り是シ地中ニ埋テ朽ルヤ否ヤヲ見テ戒ノ持犯ヲト試ルニ持戒堅固ナレハ其藤遂ニ朽ル經疏第二トイヘリ上人御年十五受戒今年五十六歲法藤ハ四十二年ナリ○釋ノ菩提ハ南天竺ノ婆羅門種ナリ勝審元年東大寺銅像成就シ給ヘリ乃菩提法師ヲ招テ開眼ノ導師ト

畫圖

○或山僧云衆徒大衆惣名也執當猶如知事亦名寺家執務小門俗事及法會威儀並回文等事今附庸梶井宮見聞ニ貫首御拜堂ノ時執當座主ノ系圖トハ古ノ鑰トシ座主ニ渡シ申ト

統仙雲律師
ニ受ト云。

○覺兼阿闍
梨未考。系圖
ニ撰政開白

道隆公七代
之孫陸奥守

良兼之四男
有興福寺覺
兼若是其人
欵

○重圓大德
未考。系圖ニ
小一條院七

代之孫齋宮
寮頭忠重之
二男有二井

長吏權僧正
修多羅院別
當重圓

○園城寺
初天智帝太

師大友氏ニ
勅シテ崇福寺

ヲ移シテ此地
ニ建ツ天皇御

夢ノ事ア又
太師ニ勅シテ

本ノ地ニ還移
サシム太師薨

シニ後其子
與多父ノ遺

言ヲ承テ天武
帝ニ奏シテ此

寺ヲ此地建
テタル即是太

師ノ家基ナ
リト云天安三

年智證大師
新羅明神ノ

告ニ依テ此地
ニ到リ大友氏

都堵牟磨ノ
讓ヲ受テ朝

シ給フ同三年四月續日本紀同之僧正ニナサレシカ。時ニ婆羅門僧止ト

ソ申ケル釋始行基ヲ開眼ノ導師ニト宣下ヲ給ヒシ。加程ノ導師

ワトメシ事。凡僧ノ身ニ應セストテ。辞シ申サレテ。菩提僧正ヲ迎ヘテ。

導師トセラレケル帝王編年記日本往來傳ト云然ニ行基ノ僧正ニナ

リシ公菩提法師ニ先々ツ事七年天平十七乙酉ノ年ナリキ等釋書又

銅像ノ開眼公十二月ノ事ナルニ行基ノ入寂ハ此年二月ナリ日本往來傳

日本紀今ノ說何レノ書ニ依ニヤ○良宴法印ハ當座一列ノ高官ナ

リ。宜ク上座タルヘシトフ○啓白ハ法事ノ始ニ願文ナト書テ十方

ノ三審等ニツノ意趣ナト申述ルヲ云ナリ。其コト一様ナラズ時ニ

ヨリテ不定ナルヘシ○前來七日ノ懺法ハ加行ノ方法ナリ。是ヨリ

以後正シキ行事ヲ。正懺悔ト云ナリ○調聲ハ今ノ聲明師ノ句

頭ト云ル是ナリ。又ハ唱歌トモ云次下ニ見エタリ○論語ノ八佾ニ盡美

矣又盡善也後漢袁安傳ニ嚴重有威トキトシテ作法ノ乱ヌラフ

ナリ○中納言兼光此卿キ一ニシテ文章得業生ニナリ。其後辨官

ナト經テ。儒業ニ長シ給ノト見エタリ。サレハ東鑑ニモ。文治五年六

月八日。鶴岡ノ塔供養ノ願文ハ。新藤中納言兼光卿ノ草。清書。堀

河大納言忠親
卿ナリトイヘリ

九月四日御料紙をひくは。依件ノ御紙ハ觀性法橋の

まごどるとし。後なり。かた法橋慈鎮和尚于時法印同宿乃

あひ。御料紙安置の所ハ和尚住坊。三條白川なり。

鳥羽院。第七宮覺枝親王ノ舊跡。ゆゑであらむ。

良宴法印以下。十一人。其經衆ハ。此所へひく。宿老

のころ。わさ。ま。家。後。よ。た。ぞ。く。へ。て。法。皇。上。人。相。國。禪

門道場。よ。は。う。き。し。せ。強。ふ。料。紙。を。銅。代。筒。よ。お。さ。え。

い。樂。よ。入。も。て。ま。つ。わ。く。む。ひ。く。を。く。ま。つ。る。南。の。ひ。く

一。た。さ。ふ。案。を。た。て。く。あ。樂。を。ま。す。へ。そ。ま。つ。る。

良宴法印以下の經衆外。よ。作。して。伽。陀。を。誦。す。正。面。の。

明障子。あ。け。し。法。皇。伽。陀。を。誦。し。は。く。ま。つ。る。

ニ奏ス。即勅シテ唐坊一宇ヲ建テ。唐國請來ノ經書ヲ納ル。寺ノ西。岩ニ泉井アリ。天智天武持統三皇降誕ノ時。此水ヲ汲テ浴湯トナス。故ニ俗呼テ御井寺ト号セリ。大師改テ三井トシ下フ

○道頭眞賢未考
○玄修阿闍梨系圖ニ中御門大納言宗俊卿之曾孫内大臣宗

能公ノ十二男ニ有興福寺玄修
○圓隆未考
○圓玄阿闍梨系圖ニ大納言隆季之九男有興福寺別當僧正圓玄。号東北院又法住寺相國為光公七代之孫下總守親盛之

二男有山法橋圓玄
○行基婆羅門釋書ニ詳ナリ
○中納言兼光。父八資長母八木工頭季兼

上人入道相國。柵ノ助音申。糝紙を道場。安置のち。行道合殺あり。この後。法橋。觀性。上人。法橋を申。をこ。なる。利

畫圖

○料紙トハ料ハ物料也。用意ノ紙ナリ。○彼ノ法橋。慈鎮和尚同宿トハ座主記ニ依。ニ和尚ハ覺快親主。入室。全玄座主灌頂。弟子觀性法橋。晴暹律師。受法ト。サレ。師資ノ間。ハツ。ミ。カ。リ。ケ。レ。ハ。ニ。ヤ。同宿ニ給ヘリ。又西山ニモ同シク籠居給フヨシ。拾遺集ニ見エタリ。○凡。迎送ノ儀。宿老ハ残り留。ミ。ラ。ン。事。平生ノ理數。當。然。今ノ儀。コ。レ。ニ。准スルヲ云ニヤ。○ヒカクニハ階カクシヲ云ナリ。○玉篇云。案。凡。屬。也。○助音ハ今ノ聲明師ノ同音トイヘル是ナリ。衆人同音ニ唱和スルナリ

○合殺ハ十因記云。聲明之法。佛號六返。合為一曲。故云。合殺。殺之言。六也。大集經復有殺。如來真實了知。六入等。或云。諸家讀經。音調有合殺。目者。宿或曰。梵語。此翻為七。或曰。翻十一。並無所據。義亦不悉。夫合殺之名。本出於樂家。謂唐舞樂。將闌時。有合殺名。蓋取唐名。以名梵樂。梵樂儀則。讀經行道。唱首引隊。諸樂屬。而和。其將終。曲調名為合殺。殺音薩散也。良以佛教唐代隆盛。故以唐言為梵曲。各本朝祖師入唐學習。故傳迄至今。有此名目也。唐崔令欽教防記云。宜春院亦有工拙。必擇尤者為首尾。首既引隊。衆所屬目。故須能者。樂將闌稍生失隊。餘二十許人。舞曲終。謂之合殺。

同日。寫經のあはじ。へら。下。藤。僧。等。撰。川。の。りて。慈。覺。大。師。の。を。こ。あ。ひ。法。橋。本。水。張。く。こ。え。詞。の。瓶。よ。い。ま。く。持。系。と。同。十。日。以。筆。立。あり。慈。性。和。為。觀。性。法。橋。い。法。經。前。よ。あ。る。法。とい。へ。と。を。も。せ。せ。よ。り。如。法。經。中。や。も。る。よ。り。く。寫。經。の。時。系。ざ。ら。り。和。出。ハ。入。道。相。國。の。志。も。て。慈。性。觀。性。法。橋。ハ。仙。雲。律。師。の。し。ま。し。て。上。人。禮。盤。よ。の。が。り。く。啓。由。下。座。の。ち。乃。た。を。り。く。伽。陀。を。誦。と。そ。は。十。六。人。慈。性。等。同。時。小。筆。を。と。り。書。寫。

○長吏圓良
九條右大臣
師輔公七代
之後權大納
言仲實卿之
男寂場房仁
實座主入室
弟子也保元
二年補橫川
長吏職
○圓能法印
公右中將通
能朝臣息彥
尊勝院青蓮
院門跡之院
室也
○法界房公
慈覺大師御
在世御房十
リ今橫川ノ
食堂ノ邊ニ基
趾尚存セリ

を。入。き。て。ま。つ。り。て。西。面。の。南。に。庇。よ。安。ん。じ。強。家。南。に
す。の。こ。行。智。律。師。法。理。を。ど。り。お。し。ま。は。る。
法。皇。う。け。ご。せ。お。う。ま。り。て。長。吏。圓。良。法。印。に。や。し
な。ま。し。す。と。れ。あ。ひ。び。陀。を。補。と。法。導。師。圓。能。法。印。時
法。橋。な。り。説。法。の。ち。中。門。の。不。良。く。布。施。を。給。ふ。次。よ
十。天。樂。を。奏。と。さ。て。法。界。房。よ。法。導。乃。の。ち。宗。明。樂
を。奏。し。伽。陀。を。誦。と。し。導。師。又。圓。能。法。印。か。り。啓。由。下
堂。の。後。中。堂。と。條。幸。あり

畫圖

○首楞嚴院ハ横川ヲ云ナリ○水飲公彼山ノ半腹西坂口ニアリ今
ノ人寄ナリ古ハ湯藥ヲ設テ此ニテ疲勞ヲ慰シケレハ呼テ水飲
トイヘルトソ釋書皇サレハ名ツケテ和勞堂トモイヒ又山中ノ僕童
麓下ノ樵兒等カ息ケレハ童堂トモ名ツケレトナリ在古ノ堂トナハ

○山槐記云
安元元年九
月十二日根
本相為大風
被吹卧或山
僧云慈覺大
師滿四十年
齒落死相現
給仍避東塔
求寂賞之地
至于此所作
地為縣向在

構廣カリケルニヤ本尊觀ヲ安シテ脱俗院トナレタリサレハ水
飲觀音銘トテ朝野群載ニ記在セリ委クハ地理ノ中ニ注ス○鳥
居ノ岡ハ西塔ヨリ横川ヘカヨフ中路ナリ不二門ノ鳥居トテ慈覺大
師所立ノ鳥居アリ榜シテ願諸來向者皆入不二門首楞嚴院ト
書レタリ今唯鳥居ノ三現在シテ額ハナシ三寶輔行記ニハ不二岡トモ
名ツクトイヘリ慧心僧都山ノアナタニ彌陀ヲ拜セシモ此地ナリ因テ
鳥居ヨリ西ノ峰ヲハ阿彌陀ノ峰ト云○四季講堂ハ村上天皇ノ
御願慈慧大師ヲ開祖トス此處ニテ五部ノ大乘經ヲ四季講讚
シケレハ此名アリトソ今横川ノ大師堂トイフ即是ナリ山僧寺
院ノ中ニ注シヌ○如法堂ハ慈覺大師石墨艸筆ヲ以テ妙法華
經ヲ書キ小塔ニ收テ一菴ヲ置給シヲ如法堂ト名ツク其庵今ノ
首楞嚴院是ナリ天下是ニ則テ法華ヲ書テ如法經ト號ストソ
釋書ノ大師ノ傳ニ見エタリ此堂今ハ廢シテ只址跡ノミアリ大師
堂ノ後ニアタレリ寺院ノ中ニ注シヌ○法界房ハ食堂ノ邊ナリ法界
房屋數トテ今尚基址ヲ存シヌト房舎ハ亡タリ○淨履律ノ中ニ
淨履觸履アリ意知ヌヘシ○筵道ハ凡威儀アル場ニハ通路ニ物ヲシ
ク往來ニ便アラシムトナリ是ヲ筵道ト云シク物時ニ隨テ不定ナ
リ大抵ユモ或ハ白布ノ類ナリ天子ノニハ紺地赤地ノ錦ナト敷事

三尾彼中尾
上有龍穴彼
穴上被建立
横河之中堂
謂三鉢峰伴
峯臨谷西方
南北互有峰
是被理如法
經之所也伴
三鉢峰北尾
未邊谷路傍
有此相其鉢
高五丈許狀
南方有穴其
内一丈許也
高。許。住。年
見始之時其
穴口切立格
于近年見之
立板二枚其
廻有釘貫立
鳥居其内人

不入鳥羽院
御幸之時於
釘貫外令禮
給伴樹之程
不高杖指也
今不枯有青
葉慈覺大師
籠居此内令
行法華三昧
給之間夢服
甘露覺猶餘
味在口其後
命延建立堂
宇入唐給也
○中堂山門
三院記云首
楞嚴院根本
觀音堂在砂
碓堂西普檜
皮七間堂一
宇前有安置
聖觀音像下

モアリ。源氏ニ三千ノ程。ソリハシワダトノニ公ニシキヲレキ行トアリモ
筵道ノウハシキナリトソ。今ノ俗葬場ノ三千ニ。鹿布ナトシク多儀
トスルモ。此ニ習ヘルニヤ○南ノ箕子トハ和名鉢ニ切韻云箕音責
式板敷敷實。今ノ内縁ナリ○ハタシタハスハ渡賜ノ宇ナリ○中堂ハ
横川ノ中堂ナリ。事寺院ノ部ニアリ

中堂より還御食堂あり。其の東をありしと云ふはこ
のありし。前住正上に群衆く。延年獲む其藝伎やど
こ。奉行人定長御をきて。願を為す。其のありしと云ふは
前住正念のいすすと云ふあり。穀感ふありしと云ふは
澄雲法不ふ。おんせと云ふあり。澄雲をよむあり。初定の
おんせに。前住よりおんす。そのちのゆるふをよむは
と云ふあり。還御あり。玄魁より押小路敷より。法本を
場あり。懺法をよむあり。これを懺法と号す。

柳慈覺大師の門徒餘流山門園城の碩徳高僧その
數おんる中。隱遁の上人をめりしと云ふは。法先達
と云ふは。そのありしと云ふは。佛徳のいありし。其歸依の
ありあり

畫圖

○食堂今尚現在ス。中堂ノ北ニアリ。寺院ノ中ニ見ユ○延年ノ舞ハ
摠シテ舞樂ノ時。最初ニアル儀ナリ。露拂ナト云ニ同クテ。惡鬼
ヲハラヒ。魔障ヲ去ノ一術ナリトソ。何ノ比誰人ノ始ムト云ユト。知
人モ今ハナキニヤ申傳ヘズ。大抵コノ場ヲ構フルニハ。四方三十間許
芝ヲタ、ニテ縁トシ。承仕ナトヤウノ者。甲兵ヲ帶シ。小童ノ異形ナ
ルニ。床枕モタセ來テ。腰ウチ懸テ。芝居ヲ圍ム。中ニ。符衣着タル兒ヲ
ナラヘテ。其中央ニシテ。舞カナテルトソ。其藝様々ナル中ニ。夫儀。床
拂。僉議披露假屋樂。誦物。中俱舍。乱舞。ナト云事アルヲ。遊僧トテ。
色々ノ裝束キタル法師ノスルワサナリ。糸綸。韓神。ナト云ヲ。兒童ノ
ワサトス。其外樂。朗詠。白拍子。開口。當弁。伽陀。連事。兒儼。風流。大頭。

慈覺長意
慈念 慈忍
源心 禪仁
良忍 獻空
源空

ヲ相國丞相ト名ツクルナリ。東方朔傳ニ都卿相位ヲト云ヘリ。○宮中ノ侍女。女御后妃等ナリ。九卷傳ニ八條院。殿富門院。宣陽門院。七條院。准后宮ヨリハシメ奉リテ。大臣諸卿戒文ノ受者。念佛ノ體。天下ニミツトイヘリ。○清和ノ御受戒。釋書ノ慈覺ノ傳ニ貞觀元年。代實錄。上菩薩戒ヲ受給フ。神皇正統紀云。法號授タテラハ素真ト申ス二年淳和太后菩薩戒ヲ受。三年太皇太后藤順子。三摩耶灌頂ヲ受給フトイヘリ。又資治表ニ見エタリ。○嫡嗣ハ嫡々相承シテ。戒脉相繼ヲ云ナリ。慈覺長意慈念慈忍源心禪仁良忍獻空源空ト。九代ノ正統ニシテ。更ニ傳出ニアラス。故ニ嫡嗣ト云。傳戒論云。如傳教大師所定。於我門人。以智道兼備之仁。而為傳戒。嫡弟以授。九條架袋。十二門戒儀。於是獻空門人其數雖多。智道兼備之仁。方當源空。南岳十七代傳戒露地。七代嫡法。迺感得瑞夢。於源空傳衣。傳戒已畢。故南岳十七代架袋。妙樂。十二門戒儀等悉得讓於獻空上人。即成天下戒師。又云。高祖面受法蓮。乃至成覺等有傳戒之分。但聖光上人受其嫡法耳。以南岳法衣。妙樂戒儀。而為支證。傳戒傳法已畢。聖光付佐介。佐介付白幡等。書略是則山門ノ戒法。大師ニ至テ。正流脉譜直。具ニ第四十三卷ニ注スヘシ吾家ニ移リ。法衣寶器。三十五門ニ納レリ。サレハ南岳十七代ノ架袋。今尚鎌倉ニ在テ。光明寺ノ重寶トナレリ。聖光上人添トコ置文亦添底ニ納在

○法住寺拾芥法住寺。法性寺北。太政大臣為光公建立。大鏡七。二恆徳公ノ法住寺。釋書資治表。正曆三年。冬慶法住寺。○御所百鍊抄仁安二年正月十九日。上皇御移。法住寺南殿。件御所。元稗渡。故信賴卿。

セラル。圓頓戒ノ寶瓶ハ洛陽ニ留テ。淨華院ノ寶物。タリシ明證。仰テ信セス。アアラシ瓶衣等ノ所在異說往々也。第三十七卷ノ中ニ見エタリ。○一器ニツタワリトハ。經云。阿難領受佛法。如寫瓶水。傳之別器。更無遺餘。瓶器雖異。水則無別。要覽。○イミシトハ。咲花抄ニスクレタル云ナリ。美ノ字ノ意ナリ。
後白河法皇勅請ありを執し。上人法住寺に祈し。乘圓戒を。山門を申されたり。山門園城の碩徳をめされ。番り。往生要集を傳し。をのく。所存は。後戒のべされ。此のり。上人。おぼせ。た。あ。ひ。く。披。禱。法。あり。て。往生極樂。戒。行。ハ。濁。世。末。代。の。目。足。かり。道。俗。貴。賤。を。改。せ。ら。る。る。も。の。と。よ。う。と。あ。げ。給。より。さ。う。め。り。ま。さ。し。め。さ。る。や。に。い。ま。こ。も。に。う。ま。り。あ。ま。り。と。く。の。感。深。く。お。ぼ。し。り。ま。り。

屋被立之。而依狹少周防。守季盛所造。進也。
 ○往生要集上中下三卷。
 慧心院先德源信僧都作也。
 ○蓮華王院釋書資治表。長寛二年。院御。十二月。廿二日。百練。日。太上皇。河院。慶蓮華王院。拾芥抄等。治承。高倉院。御字。二年。十月。廿七日。供養。了。新千體。ト。号。スト。

御信仰のあまもり右京權大寺隆信朝臣よおやせと
 上人の真影を圖して蓮華王院の寶藏よおさめ
 願は先代もその例あり申あへりある。

○園城公三井寺ナリ。寺院ノ部ニ注セリ。○碩徳ハ大徳ト云ニ同シ。唐高僧傳ニ草堂寺洪儒碩徳畢萃如林ト。○披講ハ卷ヲヒラキテ講談スル也。○隆信朝臣。子息信實ハ親子トモニ妙畫ナリキ。第四十八卷ニ信實モ真影ヲ書シタル事ヲ載ラル。似繪トテ。人ノ形ナト摸ニ上手ナル由系圖ニモ注シタリ。或説云建久二年ノ春後白河法皇ノ勅ニヨリテ。右京權大夫隆信。法然上人ノ真影ヲウツシ奉リ。又自身モ一鋪圖シテ恭敬シ奉リヌ。カクテ有夜ノ夢ニ形像モナク。六月輪ノミアリテ。傍ニ和歌アリ。月影ヲ雲ノ上ニテウツシテ。西へ行ヘキ。ルヘトモ見ヨト見ケルトナシ。或記九條ニ見エタリトソ。サレハ世ニ月影ノ御影ト云。此ニ起レリトカヤ申侍リ。○蓮華王院。今ノ三十三間ノ御堂ライヘリ。寶藏ト公種々ノ寶物ヲ納ムルヲ云ナリ。宇治東大寺等ノ寶藏ノ如シ。

後白河法皇。ひとよ上人の勸化は御信

仰。他よことわらば。百萬遍の善行。二万餘箇。建
 まて。切を流。比類あき。事おて。だ。あり。く。たる。建
 久三年正月五日より。法皇あり。あ。に。日。ふ。志。さ。ひ。く。
 おも。せ。ね。く。ま。を。れ。ん。善知識よ。美。さ。く。は。
 爲。ま。り。仰。下。さ。る。に。よ。り。く。二月廿六日よ。上人
 新。た。ま。ひ。く。戒。を。授。け。ま。つ。く。ま。に。往生の後
 式。を。さ。ぐ。免。申。は。る。念佛往生の道。日。ご。る。ま。こ。し。
 め。し。を。う。れ。な。る。う。へ。さ。ひ。て。申。入。し。じ。ひ。ゆ。ん。こ。ろ。
 たり。さ。い。ま。く。信。心。あ。り。て。高。念。佛。を。こ。し。せ。た。ま。は。り。
 ず。法。皇。終。ち。ら。げ。く。せ。給。な。ま。は。同。三。月。十二。日。成。尅。よ。
 佛。法。後。し。や。ま。つ。り。也。十三日寅尅。山。條。決。心。念

あゝ。稱名相續し。海端坐禪するものおしくして
往生す。素懐をさげさせ給ま。以年六十六なり。
誠よ海宿縁のいり。あつれよそおが通化す。

○吉記 吉田
大納言 經房

○十萬ヲ億トシ二百箇度ヲ限トシテ總シテ計シ念佛ノ數二千億ニ
滿給ヘリ。惠心僧都二十俱胝遍ノ念佛モ一生ノ御ツトメナリキ。是ハ
臨時ノ別行ニシテ對論ニ及カタシ。良ニ上古ニモ取サル御ツトメナリ。當時
アニ比類アラシヤ。後嵯峨ノ上皇モ百萬遍御念佛アルヘントテ。寶治元年
二月九日。石清水ノ社ニ參籠シテセリ。百練抄後土御門院文明四年
五月十六日。百萬遍御念佛アリ。同八年正月十六日。又此御勤アリ。
親長卿記シモ。萬乘ノ主トシテカ、ル御志ノ淡サヨナド申アヘレド。ソレハ邈近
ノ御事ナリキ。今此御ワザハ凡人ニサヘアリカタシ。況ヤ尊貴ノ上ナキヲ
ヤ。又有ヘントモ聞エ子ハ比類ナシト云ナリ。盛衰記第八金鳥東ニ耀ハ六
部轉讀ノ法水ニ身佛性ノ玉ヲ磨キ夕日西ニ傾ハ九品上生ノ蓮臺ニ三
尊來迎ノ御心ヲ運給ヘリ。常ノ御座ノ御障子ノ色紙ニ書セ給タリケル
名句云身暫雖居東土八苦棘之下心常令遊西方九品蓮之上
トソアソバシタルナト云ヘリ。吉記ニ壽永二年二月廿一日之也云三七
日之間法皇御所作法華三百八部百萬遍ニ外禪行法等
不違注記云熊野詣サヘ三十三度此後更ノ御願ニテサセ給ヘル東鑑
トナシヨロツニ御志勇カリシ事ニヤ。○建久三年正月五日。東鑑ニ建久二
年十二月中旬ノ比ヨリ法皇御不豫御痢病ト御不食ト計會ノ由
其聞エ有ニ依テ幕下朝賴今日ヨリ潔齋シテ御祈禱ノ爲ニ法華經ヲ
讀誦シ給フ。同三年二月四日ノ比玉體腫シメ給フ。此御事ニ依テ幕下頻ニ
御祈禱アリテ秘藏ノ御劔ヲ石清水ニ奉ラルト。○明月記。建久三年
三月十三日。紀云雜人云院已崩御或說云亥刻計御氣絕了而
被秘之間人不知云又云法王御臨終之儀更無遺亂。夜前戌時
計被奉渡御佛。其後御念佛遂如眠令終御云其時候御前入本
生房。大原御室醜聊座主東鑑ニ三月十三日寅刻太上法皇於六條殿
崩御御不豫大腹水云召大原本城房上人為御善知識高聲御
念佛七十返。御手結印契。臨終正念乍居如睡遷化云計寶算六
十七已過半百。謂御治世四十年。殆超上古白河法皇之外。如是
君不御坐矣。幕下御悲歎之至。丹府碎肝膽云御追善ヲ修セラレ
事。又往々ニ見エタリ。此中ニ大原ノ上人御善知識ニトアル。正シキ御最
後ノ時ナリ。兼テハ吾大師ヲ召サレシ事ナリ。カノ本成上人公平生ノ御契
淡クテイツモ參リ申サレシ事。盛衰記ナトモ見エタレハ今モ又カクソア

○大和入道の
其種姓行跡
未詳系圖有
從五位下大
和守左衛門
尉親盛冬嗣
公十三代孫
ナリ

○八坂引導寺
寺八坂ノ塔ノ
北高臺寺ノ南
靈山ノ通路ニ
青龍寺ト号ス
ル觀音ノ堂宇
アリ相傳即是
昔ノ引道寺見
佛ノ所住六時
禮讚始行ノ道
場ナリト此寺
上古天台宗
三ノ本尊藥師
ノ三尊ナリシガ
應仁ノ兵火ニ
佛像經卷悉
燒失セリトカヤ
○土御門院
公久皇八十三
代諱為仁後
鳥羽院第一
ノ御子也母ハ
御子号承明
門院内大臣
正一位源通
親公之養子

ラメ東鑑ニ御入棺ハ澄憲僧都靜憲法印ヲ役人トス同十五日法住
寺ノ法華堂ニ葬リ奉ルト百練抄ニ以御平生儀奉渡蓮華王院東法
華堂下○御年六十六東鑑三十七上勘ルニ大治二年ノ御誕生ニ文治
二年六十ノ賀ニアタリサレハ賀ノ後六年ヲ經テ建久三年御年六十
六ナリ○誠ニ御宿縁アワレニソトハ上人ノ御教化玉體ニソニテ
此世ヒトツノ事ニアラシクツハ殊勝ノ御事ナリトソ

法皇崩御後ハ其菩提ノ心ゴガクニ建久三年
殊アキニ後大和前司親盛入道法名ハ坂ノ引導寺に
心阿弥陀佛調聲ノ住蓮安樂見佛等たごひ
助音ゴヨトテ六時禮讚を修シ七日念佛ケチ結ケチの時
種シユニ捧物ササグをゴトハいテ修シルニ上ノ人ノ不レ更レノ心也ナリ
其ノ心ニ念佛イフニシテ免レノ法トハナリ法皇ハ
其ノ菩提ノ廻ル向スルニシテ免レノ法トハナリ法皇ハ
其ノ菩提ノ廻ル向スルニシテ免レノ法トハナリ法皇ハ

禮讚苦行のレめなり
○不受ノ氣トハ不受ハ第四卷ニ注セリイキトホル氣色ナルヲ云○苦行
ハ勤苦修行ノ意辛勞シテ勤ルヲ云ナリ一世勤苦須臾之間經トアルモ
此意ナリ

後白河法皇ハ十三年のハ遠キ忌ノありニ土ノ門ノ院ノ元久元年三月ノ御佛事を修シルニ上
人蓮華王院ノ浄土ノ三部經を書寫シルニ能ク
聲をシルニシテ六時禮讚を勤行シルニ能ク
其菩提をシルニ能ク訪申スルニ能ク

○此事御佛事ト云蓮華王院ニシテトアル上人ノ私ノ御訪トハ見えサルナリ
定テ勅定ニ依テ御導師ヲ勤ラレケニ實ニ規模ノ事ナルヘシ一書ニ平松ノ
御房ニテ御一周忌ニ七日ノ念佛ヲツトメラルト是ハ私ノ御訪ナルヘシ松

又大和入道見佛を。おなり。法皇此の菩提をいのり
申さん。あに。い。乃。法を。修。入。事。思。惟
らる。に。法皇。見佛の。愛。我菩提を。は。如法。訪。為
さ。の。を。示。を。里。則見佛此由。故。上人。申。我。ん
上人。浄土の。三部。經。を。如法。書。寫。す。べき。次第。法。華
如法。經。な。ど。へ。法。則。を。お。家。所。謂。の。記
よ。云。

浄土三部經如法經次第

一御料紙事。紙曾。紙。殖。千。日。是。紙。を。こ。あ。其。る。い
念佛禮讚を用。為。る。紙。を。用。為。る。料紙。を
く。い。市。紙。紙。を。用。為。る。

一堂莊嚴事 如常

一前方便七箇日事。沐浴。潔。齋。淨。夜。等。常。此。但
綸。綿。の。類。用。否。人。の。意。に。あ。る。也。

一入道場次第。門前の。灑。水。并。香。呂。花。籠。香。象。等。常
此。等。次。り。を。云。行。及。三。區。奉。請。令。教。等。常。此。出
陀。を。讀。む。へ。其。初。よ。云

歸命本師釋迦佛 十方世界諸如來
願受施主衆生請 不捨慈悲入道場
南無十方三世一切諸佛。哀。愍。納。受。入。此。道。場。

○紙曾ハ紙ニスク州ヲ云ナリ。又楮ノ字ヲカケリ。今時泉涌寺ナリニ市ノ紙ヲ清水ニテ洗ヒ今年支度ニテ明年ノ料ニ充ルトソ。○堂莊嚴大抵道場ノ莊嚴ハ中央ニ寶輿ヲ安シ四方ニ神幡ヲ懸テ前ニ禮盤以下ヲ置リ香華ヲ器物ニ盛テ寶輿ノ縁ニナラフ。經衆三方ニ並居テ書寫ス。人數多キハ百二十口。極少ハ十二口ナリ。今時泉涌寺等軌則粗如此也。凡幡蓋以下ノ嚴具寶輿書机ノ形貌並僧衆ノ衣服著坐ノ次第等大略畫圖ノ中ニ模様セラレタリ。○華籠ハ散華ノ時ニ用フ。當時竹或銅鑰ヲ以テ作り眞紅等ノ組緒ヲ垂テ盛ニ華ヲ以テ時ニ隨テ散供スルナリ。是諸經ニ所謂木祴ニ倣ヘルナリ。文句五云ニ藏法師云木祴是外國盛華之器。○香象ハ當時木ヲモテ象ノ形ヲ作り背ヲ上ラ爐トシテ香ヲタキ道場ノ戶外ニ置テ足香ノ用トス。法苑珠林云迦葉佛付我香爐前有十六頭半是師子半是白象。於二獸頭上別起蓮華臺。以此為爐於四椽上起六銀樓樓出天童可長二寸如是童子合有九十六。每燒香時諸童子各々番來起香爐後師子向外蹲踞頂上有龍盤繞上承金華內有金臺即為寶子子有十三萬億真珠大樓盛諸妙香乃至皆是拘留孫佛所製付佛義楚六帖今ノ香象コレ倣ヘルニヤ。○奉請ハ諸ノ聖衆今此道場ニ來臨シ給ヘトテ偈頌ヲモテ招請シ奉ルナリ。此中ニ記セラル讚文ハミナ法事讚ナリ。○寶座ハ書寫ノ經ヲ安置ノ為ニ設置ナリ。○讚歎ハ御經ノ功德ヲ講說スルナリ。今ノ談義ト云ニ同シ。今時ハ宗ニ依テ唱別ナレト事ハ一ナリ。○例時ノ作法ハ釋書ニ仁壽元年以五臺山念佛三昧法授諸徒修常行三昧別傳古事談ニ例時ノ彌陀經トテ慈覺大師入唐ノ時五臺山ノ北臺晉通院ニ至リテ生身ノ丈殊大聖ニ值給テハ功德池ノ浪ノ音ニ唱ケル曲調ヲ得テ引聲ノ彌陀經同ク念佛ヲ授リ給ヘリト。第二十四卷ニ例時ノ作法ハ叡山ノ常行堂ヨリ出タリト云帝王編年記云大蘓山法華三昧清涼山常行三昧大師慈覺之所傳也。解歸朝纜赴野馬臺於船上三尊顯現傳成就如是也。節給或記曰澁河邊隋煬帝於行作此曲慈覺大師引聲念佛以笛被渡之。今曲其音也。又云寬平六年八月十一日常行堂始修引聲念佛彼引聲念佛者於大唐清涼山謁法道和尚所傳給極樂法音也ト。大師音曲ニ不堪ナリシ程ニ笛ニ合セテ傳給ヘリ。サル程ニ成就如是功德莊嚴ノ所ニ至テ所傳ヲ忘失シテ曲節笛ニラサリケルニ尊示現シテ也ノ字ヲ加ヘテ曲調ヲ助ケシム。サテ音律調テ事ナク傳來シ給ヒケルトソ。已上諸說與真如堂緣起粗類。但以笛被渡之事未載。引聲念佛ノ事委クハ第三十六卷ノ中ニ注セリ。○早勉ハ遲速ナリ。時ノ様子ト云

一寫經七箇日事。沐浴潔齊入道場禮讚念佛讚歎
 讀經等次第。前方便のごとく。一事も違ふべからず。
 筆立の次第。初日晨朝礼讚以後啓白あるべし。其
 分量を選ぬ。分経并墨筆等以下は諸事常れ
 ごとく。日別の書寫禮讚以後多少時よるぬ。但七
 箇日れ男。其切ハ終極まかり。日別解説日中の
 禮讚以後たるべし。日これ次第。是よたごへくと
 ぬ。七箇日の目れ後式くのよと
 次り奉納の次第常れごとく。佛経後教を
 但後教の多少。時宜にらるべし。奉納路次間の合教
 等のこと

○分經トハ一兩紙ツ、宜キ程ニ切分テ。經衆ノ寫本ニスルヲ云ナリ。○墨
 筆ハ慈覺大師ハ石墨草筆ニテ書給ヘル事釋書ニ見エタリ。今時ハ多分朱ヲ
 モテ書藁ヲ束テ筆トス。已上軌則漢語燈錄ニ載ラレテ今ト全同ナリ

上人記録ハ法則がごとく。遠近のつめに。ねらの
 菩提を授くる事。そのつらなり。くはまるかかん
 中はよく伝る。されど其は三部經法。如法よ書寫
 とらる事。世にわづきこえたり

畫圖

○世ニオホクキコエ侍リトハ文永四年四月。後嵯峨院於龜山殿。三部
 經如法書寫シ給ヘル事彌世繼ニ見エタリ。次上ノ卷ニ注スカ如シ。新續古
 今集ニ淨土三部經書テ舞樂ニテ供養シケルニ。權中納言具行イマタ少
 將ニテ。陵王舞侍シカハ。又ノ日申ツカハシケル。頓阿法師。山ノ端ノ入日ヲカヘス
 袂ニモ。西ニ心ヲカクルトソコニ返シ。山ノ端ノ入日ヲイカテ返シケン。我々ニ西ニ
 イソク心ヲ

後鳥羽院度之勅請ありて。圓戒を法傳受上西門院。修明門院おろく。以て更戒ありき。うへに。は。二公。公卿。うへ。海。越。わ。り。よ。け。一。朝。あ。ひ。ぎ。て。傳。戒。乃。師。と。せ。ん。也。り。事。な。り。と。さ。

畫圖

○後鳥羽院ノ受戒。此事年代以下。未有所勘也。按スルニ上入配所ヨリ歸洛以後ノ事ナルヘシ。第四十卷ニ至テ注スヘシ。○上西門院。此御事及御出家等ノ事第七卷ニ見ユ。修明門院重子公。贈左大臣從一位範。奉卿ノ女。後鳥羽院ノ御后。順德院ノ御母也。帝王編年記云。承久三年七月九日。落飾。為尼。謚號雜記云。建永二年六月七日。院號。○三公公卿トハ。太政大臣ト。左右二大臣ト。三公ト云。大抵三位已上ヲ公卿ト云。四位五位ヲ殿上人ト云。

卷十終

圓光大師行狀畫圖翼贊卷十一

事義

傳本第十一

諸人の歸依ありて。中にて。九條の関白殿下

兼實公号後法性。信仰他りて。崇重比類あかりま。

二月十九日法性も殿乃法忌日よ。佛事ありける小。

傳供代と記僧俗座を分て。立た。へ。今日。こ。こ。に。

福ん。あ。た。り。に。佛。事。あり。と。人。を。傳。供。よ。と。之。給。海。

と。殿。下。お。ほ。せ。と。あり。ま。社。ん。松。殿。基。房。ま。こ。こ。に。

さ。能。海。と。申。給。り。上。へ。隱。迹。の。身。る。う。へ。九。僧。

よ。て。お。い。す。る。に。慈。鎮。和。尚。于。時。受。戒。乃。師。範。と。て。怒。

○關白兼實
ハ法性寺忠
通公之三男
母ハ太皇太后
宮大進仲光
之女也久安
五年ニ誕生
文治二年三
月十二日攝
政氏長者時
年三十八同
五年十二月
十四日太政
大臣建久二
年二月廿七
日東鑑大系
十七攝政ヲ



翼贊 卷十一

改テ開白ト
十ル九條ニ
條一條等之
元祖也

○松殿基房
ハ法性寺殿
ノ次男母中
納言源國信
ノ女ナリ

○菩提山ハ
大和國添上
郡ニアリ龍樹
院正曆寺ト

号ス正曆年
中勅ヲ奉テ兼
俊攝政兼僧
家之子僧

正ノ建立其後
建保六年信
圓大僧正ノ
再興ナリ

○僧正信圓
ハ法性寺殿

息女國信卿
女松殿同母
弟也治承五
年二月補興

福寺別當兼
大乘院即為
當門主第十
世文治元年

八月廿八日
大佛開眼ノ
光顯師タリ

○三位範季
ハ刑部卿範
兼卿ノ男ナリ

實ハ故式部
少輔能兼ノ
三男ナリ母ハ

高階為賢ノ
女ニテ範兼同
腹ノ弟也建久

八年十二月十
五日從三位

ざつれく。上人を座とよひまやされきれん菩提山
の僧正信圓おろく上座致しづりやうもたりのたまふ
上人兼僧正の上り立ちく松殿の信の一屋少くは
うへはまきるにむらひく僧共一屋ありきり。道德
乃りりいうまきりてはゆるいれ

畫圖

桓元子カ表ニ上代之君莫不崇重斯軌○恕ハ宥テリ宥ハ寛ナ
リ是師範タルニ由テ官階ヲ論セス寛裕ニシ座ヲユツリアケラル、
トナリ○菩提山ノ僧正ハ法性寺殿ノ息松殿同母ノ弟月輪殿慈
鎮和尚皆御兄弟也具ニハ
僧尼ノ部ニ注スルカ如シ

月輪殿をほくくれきりて例あるま屋を一字指圖

殿下されく立ちきりれきり殿下れいおろく見世へ

とまか依屋いまる見世と源と奉行の三位範季

御申されまは思食振ありきりいれきりれきり

まのけりたりたてきり何事れに料よかとおもひ

よんや上人のい屋とまごりありきり老者よんお

りせんまごりてくやとあてきりてのちに法

對面あらんあめてそありなるい信のあり。れま

でのい沙法よまよびれんあひきりまごりたきり

そ時の人申あへりきり

畫圖

凡洛陽近邊二月輪ト名ツクル處ニ所アリ其一ハ愛宕山ノ東ノ
半腹ニアリ鎌倉山月輪寺ト号ス入皇四十九代光仁帝ノ御
宇天應元年慶俊僧都ノ草創唐土ノ五臺山ニナラヘテ五岳
寺ヲ建ラレシ是其第一ニシテ大鷲峯ト名ツク真統上人空也

建仁二年閏十月廿四日
 正三位今一
 宇ヲ新造せ
 ラルノ奉行ト
 アルハ木上頭
 元曆三木三三
 頭三任ス
 アハルヘン
 ○僧都覺心
 ハ系圖云醍醐
 帝御子右大
 臣源高明ノ
 三代良宗之
 孫知房之息
 ト云御堂開
 白道長ノ二
 代信長之孫
 從四位下民
 部少輔知房
 之息寺權僧
 正覺心母中
 納言公能卿
 ノ女也

自告實名爲謁
 見刺候ト同シ
 凡賢徳ノ人ニ
 見ユルニ刺ニ我
 カ姓名ヲ書テ
 奏シ内テ見エ
 シテ請フナリ
 今口ツカラ共
 實名者亦敬
 尊者之禮也

上人ヲ住シ給レトク其ニハ叡山ノ西ノ麓修學院ノ邊ニ古ハ月輪
 寺ト云アリキ今ハ寺ハ絶テ田地ノ宇トナレリ又扶桑略記本朝
 文粹日本記略二月林ト書タルモ同寺ナリトク其ニハ東福寺ノ東
 ニアリ兼實公ノ月輪殿此所ナリ○料ハ度也量也此ニ言ハ何ノ
 為ノ用意ソトナリ

ある時上人月輪殿へ参りて佛へあはれ殿下高きごとく不
 ておのびつらせぬまへに聖覚法平三井の大納言僧
 都覺心おろくわらじういせささくれたり上人僧都を
 あやしきに見たまふ聖覚あはれの大納言僧都は房
 作と申さふきは僧都よりあへど覺心と名のり申
 されま意ハ大納言を僧都をせよおほきれん實名
 こそとれとまきまきとてまうんとあり殿下加藤よき
 させたまへんまうして卿相雲客れおとさかしく事
 おこりたり

畫圖

法印實名ヲ避ラレタルハ尋常ノ禮儀ニ依テナリ僧都自告シ
 タルハ某ト知レ申サレントナリ又是敬ノ至ナレハニヤ事具ニハ第
 五卷ニ注シヌ○天子ヲ龍ニ比シ天ニ比シ日ニタトフサレハ一等ヲ下
 シテ公卿ヲ月卿ト云ヒ殿上人ヲ雲客ト云ナリ卿相ハ第十卷ニ
 注シヌ

建久八年上人いそりたやとなまふと何のたわ殿下ぬ
 かくいるびさありける程よくほくたきて平愈一
 こまひよきの上人おのま九年正月一日より弟高よと
 ざこもりて別請よたをじれやほはらわられハ友を馬
 尉重經を佛使として浄土の法門年来教誡を承る
 といふを心腑よたさかんごとく要文を法に結つらく

此の面談よりいざい。此後の事は三つに分けられ、
一、安樂房外記入道師秀子を執筆し、二、
撰集を選り、三、此の書に弟三の章書寫せしむ。予
若筆作の器よたしけり。かくれごころの會座よ
系ぞあまのしと申はる。後、此の僧情慢の心
をくちて惡道に墮し、たんにこそ世にありぞ。此の
書は、其後、真觀房感西より書せしむ。此の書は
選進をくち、後、同年五月一日上人の愛れ中よ善
導和尚來應して、汝專修念佛を私通するゆへり。
殊更よ來れるなりと志めし。たまふ。此書冥慮よか
たへり。しとまりぬへり。あはれ信受するにあらむ。

畫圖

僧祇律云請有二種。一、僧次。二、私請。乃至言別請者。私請也。薩婆
多律攝云。別請者。謂別々施主請諸苾芻與其供養補注一切ノ
利養ハ十方ノ僧ニ屬ス。別レテ己ノ三受ルハ。十方ノ僧物ヲ取ナリ。
梵網サレト衆僧一時ニ請スベカラサレハ。次第ヲ以テ請用スルヲ僧
次請ト云。若一分ノ檀越アテ。自己ノ三請ニ赴テ。別請ヲ受ルト云
ナリ。一人ヲ供養シ。一人ヲ請用スルヲ別請トイヒ。又私請トモ云
○藤石衛門尉重經九卷傳ニハ清兵衛十六門記ニハ對馬左衛
門尉トアリ。大系圖ニ對馬守左衛門尉カ子。左衛門尉重經ハ白
川鳥羽二代ノ北面左衛門尉重時カ七世ノ孫ナリ。又重時カ養子。
小嶋左兵衛尉重俊カ子。修理亮帶刀右衛門尉重經トアリ。サレト
重時ハ多田滿政十三代ノ末ナレハ源氏ナリ。若ハ九條家ニ候シテ。
姓ヲ改テ藤石衛門トナリケルニヤ更ニ知入ノ考ヲ待ノミ。○選擇
集一書ニ此書選述建久八年ト九卷傳十六門記皆九年トアリ。○
筆作ノ器トハ文學ノ達者ト云意ナリ。サレハ此書ハ上人文義ヲ選ヒ
安樂真觀筆受シテ。文章ヲ綴リシナリ。御弟子多シトイヘトモ。此二人
モト文學ノ家ヨリ出テ博士ノ流ナレハ仰セテ執筆セシムルナラシ
○此書ノ世ニ行ハル或ハ信或ハ謗時ニ隨テ一准ナラス。其事大抵撰

二水記、鷲尾
大納言隆康
卿記也

擇之傳ニ採集セラレヌ。始終ノ興廢時運ノ然ラレル所。護法モ是ヲ
如何トモスル事ナキニヤ。然リトイヘトモ。終ニ止サル所アテ。世ニ行ハル
ルノ盛ナル事。從來ステニ尚シ。遂ニ後栢原院ノ御宇ニ當テ。恭ク宮
講ヲ經ルニ及ヘリ。二水記云。永正十四年九月廿二日於小御所
有撰擇集之講釋。三福寺長老講釋被申。連日御講釋各令聽聞。
至廿八日。七箇日御講釋果畢。於議定所。有御對面。眉目之至。歟ト
殿下の御留儀あり。上人系たまふ。殿下
たりひるせ給へ。公卿殿上人。此にあらはれ。事
上人。しる事。思召て。九條殿へ。まのたまひ。人
ために。房落り。して。別請。り。に。まじ。給。は。い。け
か。へ。ま。あ。ら。た。り。多。ま。の。事。あ。殿下。ま。り。に。あ。け
ま。あ。ら。た。り。房落。り。なる。も。身。よ。遠。例。た。の
侍。人。と。ま。り。未。給。な。ん。や。と。信。ま。の。侍。人。と。ま。り。侍
時。子。細。よ。及。ひ。侍。人。と。申。出。れ。は。せ。め。て。を
請。り。申。上。れ。給。は。し。常。に。所。遠。例。を。号。せ。ま。の。侍
此。上。ハ。辭。し。申。上。り。給。は。し。志。く。系。給。を。見。て。
門。身。正。行。房。心。中。よ。あり。此。房。落。り。と。て。餘。れ。あ。り。ま。り
ま。の。侍。人。と。九。條。殿。へ。の。ま。系。給。と。ま。り。あ。り。檀。越。を
魚。川。ら。ひ。給。と。り。人。い。ま。り。申。上。り。ま。り。侍。人。と。ま。り。侍
べ。し。ぬ。ま。り。給。と。思。て。給。は。し。ま。り。上。人。汝。ハ。わ。の
九。條。殿。へ。の。事。給。と。り。思。ま。り。侍。人。と。ま。り。侍。人。と。ま。り。侍
は。る。事。ハ。魚。川。と。申。上。り。汝。ハ。ま。り。九。條。殿。と
我。ら。は。先。生。に。因。縁。あ。り。餘。人。よ。准。ま。り。侍。人。と。ま。り。侍
ま。り。あ。る。事。給。と。り。侍。人。と。ま。り。侍。人。と。ま。り。侍。人。と。ま。り。侍

○正行房未
号

侍。人。と。ま。り。侍。人。と。ま。り。侍。人。と。ま。り。侍。人。と。ま。り。侍
時。子。細。よ。及。ひ。侍。人。と。申。出。れ。は。せ。め。て。を
請。り。申。上。り。給。は。し。常。に。所。遠。例。を。号。せ。ま。の。侍
此。上。ハ。辭。し。申。上。り。給。は。し。志。く。系。給。を。見。て。
門。身。正。行。房。心。中。よ。あり。此。房。落。り。と。て。餘。れ。あ。り。ま。り
ま。の。侍。人。と。九。條。殿。へ。の。ま。系。給。と。ま。り。あ。り。檀。越。を
魚。川。ら。ひ。給。と。り。人。い。ま。り。申。上。り。ま。り。侍。人。と。ま。り。侍
べ。し。ぬ。ま。り。給。と。思。て。給。は。し。ま。り。上。人。汝。ハ。わ。の
九。條。殿。へ。の。事。給。と。り。思。ま。り。侍。人。と。ま。り。侍。人。と。ま。り。侍
は。る。事。ハ。魚。川。と。申。上。り。汝。ハ。ま。り。九。條。殿。と
我。ら。は。先。生。に。因。縁。あ。り。餘。人。よ。准。ま。り。侍。人。と。ま。り。侍
ま。り。あ。る。事。給。と。り。侍。人。と。ま。り。侍。人。と。ま。り。侍。人。と。ま。り。侍

罪をうへまかりと信する事と母の言ふ事とのち上公
これ申候語申事也此はしてさうし。先生に因縁
ある事なりとこの語を傳は依他よりさうなるほどま
ゝにさうし事にあつたはたへたる

畫圖

○房籠トハ庵室ニコモリ井テ出給ハヌナリ今ノ山籠ナト云意ニ
テ禁足ニ同事ナリ○寢食ツ子ニカハリテ例ナラヌヲ違例ト云
ナリ若菜ニレイノサマナラヌ御コ、チニナントワツラヒ給ト。管
相承ノ詩ニ今年異例勝先断朗ト○セメテモ公何トカシテモトナ
リ源氏ニセメテシラスカホニアリヘテモ須抄ニシヒテナリト○
アハレ房籠トハアツハレノ意ニテ。此ニテホメテソレル詞ナリ
○先生ニ因縁アリトイカナル因縁ニヤ覺束ナシ夢ニ夢ノ三ナ
ラス覺テモサソカシトノ仰ゴトナリ本ヨリ權化ノ御内證アル事
知ヌヘシ。凡情實ニ測カタキコトナリ○宿習カキリアルコトヲシラ
ストハ言心ハ宿習ニ分限アリテ各別ノ因縁ナル事ヲ知ヌトナリ
○サテサソカシトハ語申ニツケテイカニモサヤウツカシトナ
リ今坂東ノ俗ニ人ノ詞ヲ承諾スル時カク云ナリ。サソトハ第六

卷ニ注シヌ

殿下てんかひらへに念佛門ぶつもん入い給たまりのらは。浮生ぶせい乃の榮耀えいよう
をかろく志し。往生淨土おんじやうじやうどの身みひなもも他事たじなりアまま
はかく建仁けん二年に正月げつ二十八に日月に輪殿りんてんありく御素ごそ
懷くわい法名ほうめいをとげらる上人じやうじんを和尚わしやうとして圓戒えんけいを受持うけ
高たか尚しやう後ごまますくぬくアリ事じ利り

畫圖

建仁二年正月二十八日東鑑ニ建仁二年正月廿七日出家法
名圓證えんていト系圖同之御素懷ごそくわいトハ出家ノ御本意ナリ

圓光大師行狀畫圖翼贊卷十二

事義

傳本第十二



ねほいの大炊御門左大臣經宗所勞其時ある人乃方便よく上
ちしき人を知識よ請し申しれらる念佛往生れしを。日比
くんしんいと沙汰よきよぬ人よて左右なく勸進れし中あ
ひまうぶしはあふるをれれ上人のりかりしを屏風を
えんぎんあしりて。あし僧とわくよとせし法門を修しれをよ
てんぎん天皇晨旦我朝まて佛法の傳れる次第などゆり
さうきを修られしを。念佛往生れ来代相應れ法なる事な
せんどこまに宣説し給ぬ。左存とれをききおしめて

○左大臣經
 宗公公京極
 攝政師實公
 ノ孫大炊御
 門經實卿ノ
 四男母ハ春
 宮大夫公實
 ノ女也。仁安
 元年十一月
 一日左大臣ニ
 轉任ス

大名ニモアラザル人々ノ知行所ヲ云ナリ。頼朝以來諸國ノ庄園ニ地頭ヲ補スト云此類ナリ。庄ハ莊ニ同シ。田舎也。領地ノ内ニ山庄ナトヲ作ルヲ庄ト云ナリ。若庄園ト云時ハ國司モ守護モイロハヌ所ナリ。故ニ昔ヨリ恩許ニ依テ。庄園ヲ領知スル者ヲ呼テ庄司殿ナト稱ズ。○我ハ院内ヨリ外ハ車タテタル事ナレトハ此公後白河院ノ御氣色ヨクテ常ニ參ラレケレバカク仰セケルニヤ。吉記云壽永二年二月二十一日丙辰。今日朝觀御幸也。主上渡御。先是法皇出御御座。權大納言兼雅卿參進。置御三衣宮。云此時參會院公卿。花山院大納言兼雅等十人誦也。同三年四月十五日之紀云。院司權大納言兼雅云云。此外此大臣ノ院ニ奉仕セラレタル事。諸記ニ往々ナリ。

○建仁三元久二
トモニ土御門
院ノ年号也

右京權大進隆信朝（いづのぶね）はく上人（かみ）ノ歸。餘佛餘行をわしをひく。たゞ弥勒の一尊（みろく）だけあがびとく。念佛の一行をせしむ。は乃よ上人（じゆん）よ志す。ひく。建仁元年（けんにん）よ出家をせし。法名を戒心（かいしん）と号す。一向專念（いこうせんねん）の外他事（ほかじ）はうつりけり。生年六十四（むそくしよ）。春所勞危急（はるのらくききい）よをよ。上人（じゆん）きり。住蓮安樂（すぜんあんらく）二人の門身をけう（けう）とく。知識（ちしき）をせし。れり。すてよをかり。このぞむ。二人の僧をた右にをきて。病者と知識（ちしき）と同音（どうおん）よ念佛（ねんぶつ）一（いつ）來迎（らいおう）の讚（さん）をとな。端座（たんざ）合掌（がうしやう）きく。往生（おうじやう）後（ご）。元久元年二月廿二日（げんく元年二月廿二日）の紫雲（むらさきぐも）音樂（がく）以下（以下）。奇瑞（きせき）一（いつ）よあり。後（ご）。正信房（せいしんぼう）の墓（はか）所（ところ）よ向（むか）く念佛（ねんぶつ）一（いつ）だまふ。異香（いこう）た。紙（し）をせ。日本（にっぽん）往生傳（おうじやうでん）よ志す。一（いつ）入られ。る。こと。なん

畫圖

○隆信。同息信實。父子共ニ繪ノ事ニ巧ナリキ。上人ノ眞影ヲ書レシ事。第十卷及第四十八卷ニアリ。○元久元年六十四ニテ往生ナレバ。今建仁元年。滿六十ノ出家ナルベシ。明月記元久二年二月二十八日記云。今日聞。右京權大夫入道（隆信）。日來病。惱夜前已入滅（しつ）。不聞及不問。病臨終之體殊勝。高聲念佛。著清衣。引五色絲。乍坐終（しゆん）。今夜以忠弘。令問之。○來迎ノ讚文多シ。一書云。二十五太士ヲ讚スル文アリ。

是曼荼羅抄ニアテ慧心ノ迎接讚ヨリ出ツ。又當時一紙餘ノ讚文アテ
永觀律師ノ作トイヘリ。又聖光上人ノ唱給ヘル公慧心僧都ノ製作ニテ。
又別ノ文ナリ。具ニ第四十六卷ニ見ユ。帝王編年記云ク觀閣黎製極
樂讚世ノ人講誦權大納言敦忠卿第一ノ女子久以爲師。相語曰。大
師命終之後夢中ニ必示生處。幾夢閻黎乘蓮華船唱昔所作彌
陀讚西行焉。此日本往生傳而ト云キスル日本往生傳云阿彌陀和
讚二十餘行トイヘリ。又律師隆兼誦無量壽經要文及龍樹普
薩羅什三藏彌陀讚至于命終其聲不絕ト昔ハ往住ニ此讚ヲ誦セシ
事ニヤ。又美福門院極樂六時讚ヲ繪ニカマセラレ侍テ。カクヘキ歌。人
人ニヨマセ給ヒシ事。新勅撰以下ノ集ニ往住ナリ。○日本往生傳凡六
家七部ナリ。一巻アリ。書目ノ部ニ注スルガ如シ。其中保胤匡房爲康ノ三
家四本ハ時代頗古。若藤宗友ノ一本ハ仁平元年建仁元年ニ至
凡五十一年臘月一
日ニ序セラレテ都テ四十一人ヲ選載ラレタレト。時代尙古ケレバ注サレズ。
其餘ノ二本ハイマダ其文ヲ見サズ。知ガタシ。又時代ノ前後モ未ダ見聞セズ。

○民部卿範
光ハ刑部卿
從三位範兼
卿ノ男。母ハ
前伊豫守源

卿二品の弟民部卿範光ハ後鳥羽院ハ寵臣ナリ。ひと
へよ上人よゆと稱名ハ外他事ナラズ。生年五十四

後重ノ女也。
長子ハ女子ニテ
後鳥羽院御
乳母。卿二位
殿ト号ス。刑
部卿ノ女ニシテ
二品ニ叙セラレ
ヌハナリ。範光
卿其第十子
卿二品ノ弟
ト云ナリ
○承元元年ハ
土御門院即
位九年也

承元元年三月十五日ハ出家を告げ法名を静心
と号と。病惱危急の由きこうめされまゝ志のびて御
業のちかむ後生れしと思ひしむせん侍ることいづ
あむすれ。今度の往生決定しつゝ疑好とこら
俄に其故去夜ハ夢よ一人の高僧來。誰人よ
あはれとそと向よ。我ハ此源空なり。唐土よりて善
導と名を。此まのくい源空といふ。此界に來て衆生
をこらびく事すてよ。三箇度なま。今汝よ命終の
期を志めさん。ために来除と。明後日午ハ尅々乃期
なるべしとの言をんく夢よあゆりぬすてよ。眞の苦よ
あづり。此を往生むじやうるべからる由紙存すと申

と是を聞食らばく御随喜あらむ。件の日時
とつてさきより正念よ安住し。称名相續して往生
候とぞ不思議の事なり。

書圖

○卿二品。後鳥羽院ノ御乳母ニ位。是ナリ。刑部卿範兼ノ女ニテ。ニ位ニ
叙シヌレバ。卿ニ品ト云ナリ。承久記下ニ。御乳母卿ノニ位殿ヲハテ參テ見
進セラル。タトヘンカダヅナカリケルトアリ。範光卿其弟ナレバ。卿ニ品ノ弟
ト云ナリ。○後鳥羽院ノ寵臣ト云。或記云。古老ノ物語ニ。紀伊守範光ハ
後鳥羽院ノ御タメニ最モ忠臣ナリ。然レドモ思召モレラテ過サセ給ヒケレバ
内々恨ミ思ヒナリ。其故ハ此君ハ高倉院ノ第四之宮トシテ。七條修理大夫
信隆卿ノ御娘ノ腹ニ生レサセ給ヒシヲ。平家西國ヘ下リシ時。此官ヲモ取
奉ントテ。既ニ乳母ニイザナハレテ下ラセ給フベキヲ。此範光道マテ走ツキテ
盛衰記ニ。十一ニ。心賢ク思ケルハ。主上ハ西海ヘ落下ラセ給ヌ。清皇都ニ
留ラセ給タレバ。御位ヲハ定テ四ノ宮ニテ讓ラセ給ハンス。ラニ神祇官ノ御
占モ表。憑モレキ事ナリトテ。ニ位殿ノ宿所ニ參テ尋申ケレバ。西國ヨリ
御文アリトテ。恐テ此御所ヲ出サセ給ヌト答ヘケル間。ニハ淺間敷事也ト
思召。ボツカナキ所。コハイカニ物ノツキテ狂ヒタマフカ。此官ノ御運ハ。
此徳尋進セテ云云。唯ハノ程ニヒラケマレヌ。ス。イカナル心ニテ具レ奉テ下ラント云。宣フゾヤ。

アルクモナシトイサメ留奉ケル。其翌日法皇ヨリ召アリテ。此官御位ニ
定マノセ給フ。是偏ニ範光ガ停メ奉ケル故ゾカレ。サレドモ誰カクトシラセ
奉ル事モナカリケルニヤ。空ク年月ヲ經ルホドニ。紀伊守餘リニ本意ナク
思ヒテ。一首ノ歌ヲヨミテ。奏覽ニゾ入タリケル。郭公猶一聲ハ思ヒイテヨ
老曾ノ森ノ夜半ノムカシヲ。ト讀テ奉リタリケレバ。其故ヲカタヘノ人ヲ
名テ尋キコレメシテ。今マテカハル事トモシラセタマハザリシコト。アカズ。時
惜ク思召テ。頓テ名出サレ御恩厚ク蒙リテ。ユシク榮ヘナリト。右ノ歌ハ
新古今集ニ入タリ。○善導大師ハ彌陀ノ化身ナリト云コト。第一卷序ノ
中ニ注シヌ。今マテ元祖ハ善導ニテオハセシトアレバ。亦彌陀ノ化身ニテ。ニス
ナルベシ。古今著聞ニ源空上人ハ直人ニオハセサリキ。彌陀如來ノ化身トモ
申ストアリ。

大宮内府 實宗ハ。歸敬の心。他よておせし。ハ。

はよに上人を謁して念佛往生をまをほさしめ。は
かに上人を和尙として建永元年十一月二十七日出
家をこけ。専修ははををさしりた。上人の入滅

○府府實宗
公ハ大政大臣
公季公院開
五世ノ孫大
宮中納言通
季卿ノ孫公
通卿ノ子也
母ハ大藏卿

通基ノ女也
元久二年十

一月二十四日
任内大臣

○建永元年
土御門院即
位八年也

○建曆二年
順徳院即位
元年也

○左大臣公
繼公定實
公之長男母
上西門院ノ
一房也貞應
三年十二月
二十五日左大
臣トナレ

○嘉祿三年
改元後堀川
院即位六年
也

をうけし初七日の諷誦をいげられし。生年六十
七建曆二年十二月八日正念す。次念佛相續して
往生城といわれり

書圖

○明月記云大臣殿已令送素懷給。法然房戒師法□奉判實信取
被物盛親取布施絹。紳言被取野劔衣帽直衣。剃髮之後着浴衣
受戒給

野宮左大臣公繼師弟契ちまうあうしは家りよ

して興福寺に衆徒上人の念佛興行をそひし申

て奏聞よ及し時上人なむびよ弟子權大納言公繼

を遠流せしるふき由申状をいれむといへり。いかに

其心ころをあしめ。専修法をいれむとす。事終

つゝ。生年五十三嘉祿三年正月廿三日職を辞し。

同しき三十日種々奇瑞をあらうして往生城と

けいまた未代の羨談とかり強へり。す處て月御雲

客中より代導りゆる人おほや侍り。かも

書圖

○聖護院公
鴨川ノ東中
御門ノ未ア
リ舊ノ名常
住院三井ノ長
更増譽僧正
以來今ノ院
号ヲ称ス

○無品親王
静惠公後白
河院第五御
子母坊門
局兵衛尉信
業女也三井
聖護院覺忠
僧正弟子建
久二年二月
十七日叙無
品親王

○僧正行舜
八系圖ニ内
大臣高藤公

圓光大師行狀畫圖翼贊卷十三

正義

傳本第十三



聖護院無品親王静惠法遠例代内醫術をにつく
正行舜大貳僧正公胤以下其人信讀代大般若經を轉
讀して祈禱をいしあさる人といはれ佛家乃變鳥
鳳僧中其龍象なりま志すてよあやうくた
りまもれし。此人をさうをせく上人を招請
せしめし。御使二度まてはかき辭退去り
たよつ流第三度代御使宰相律師實忠と云人

聖護院無品親王

十一代之孫
權右中辨光
房卿之息有
權僧正三會
已講行樂山
門大法脈譜
三智證大師
二十代之法
孫圓俊行
難行舜投救
舜若指此入
欵
○僧正公胤
公第四十卷
二見エタリ。

○律師實
八系圖ニ西
園寺相國公
經之曾孫權
大納言公藤
卿之三男有
山法印權大
僧都實且又
小一條院五
代之後下總
守有通之二
異有少僧都
實員。

來臨して理をまげく一度まらなまひて念佛れ
事申さうせう坊路へして引さる極よせりはまこ
とて往生しあはゆす人よても法座をらん
とて居る律師の車よは鼻をくまひりなまひぬ
親王御對面ありていりてこれい生死をらん
まはるべき後生たすを路へして作られまきい上人臨
終の行儀を後し申され稱隨本願たなまひまをの
魚路ゆ親王感涙まはりよせりなまひぬ致れ
まあはる路をを合さる路多上人いやくかぬり路よ
まはる路の白馬往生ありやうよ。寂後よ念佛一萬
五千遍申させ給て念佛とまよ馬息とあり路よ
あは諸人隨其のまあはる路を合せ上人の徳をを
かめ申さる。實是律師後よ馬往生れをう版上人よ
語申されまきん上人まらるるび申されまら

畫圖

○信讀轉讀ト或云文句丁寧ニ讀シ真讀ト云真ト信ト音同シケ
レハ借音シテ又信讀ト云轉ハ轉法輪ノ轉ニ同シクテ只ヨムヲ轉スト云
ナリ略讀ヲ云ニハアラスト。梁高僧傳十三云然天竺方俗凡是歌詠
法言皆稱為唄至於此土詠經則稱為轉讀歌讚則號為梵音見
聞云或住山者敬山寂語云山ニテハ訓讀ヲ信讀ト云ト今按スルニ
第四十四卷隆寛傳云阿弥陀經轉讀ノ事乃至一卷ハ異音一卷唐音
一卷ハ訓ナリキト。サレハ音ニモ訓ニモ次第ニモ超越ニモ只ヨムヲ轉讀
ト云ナルヘシカレハ真讀ノ經ヲヨミシタルヲ轉讀トイヘルニヤ九卷
傳ニ門徒ノ高僧等大般若ヲ轉讀シ奉リテトアリ又大般若經
轉讀人々僧正行舜宰相僧正公胤大僧正覺實左大法印顯惠納
法眼圓蒙大納言法印公推宰相法印道嚴法印信觀云ト○鸞鳳
龍象ハ李太白力與韓荊州書ニ龍蟠鳳逸之士中阿含ニ若沙門

等從入至天。不以身口意害我。彼是龍象。垂裕記云。龍象為龍
猶云龍馬。周官曰。馬八尺已上為龍。肇師云。象之上者名龍象也。
若依大論。乃是二類。龍是水中之大。象是陸行之大。鸞鳳亦是空
行ノ大。皆行德ノ大ナルニ比シテ云ナリ。賈誼力弔屈原賦。鸞鳳伏
窟。鸞鸞翱翔ト云モ。大人ノ德ニ比シテ云ナリ。日本紀ニ龍象ノ大德
ト云フ。オコシキホウシト訓ス。○律師ノ車ニノリ具シテト八角
レイノヒトツ御車ニテオハスナトアリテ。昔ハ假初ノ往來ニモ車ヲ
ケレハ事ノ便ニ隨テシタシキ中ノ同車ニテアリキケルトフ。サレハ男
女老少同車セシ事。源氏ナトニ往々ニ見エタリ。古今著聞。小野宮
殿九條殿。御同車ニテ出仕セサセ給ケル。又四條院ノ大將。小一條大
將。左右大將ニテ同車シテアリアレケリ。コノ比ハ父子同車ノ事ニ
モシナリ。寛元二年賀茂臨時祭ノ時。二條前。關白。一條殿前。左大
臣ニテ。ニイリアヒタニヒタリシニ暮テ事ハテニシカハ同車ニテ二條
室町ニタテラシ。御見物アリケリト。詩ノ北風ニモ攜手同車トアリ

延曆寺東塔。竹林房靜巖法印。吉水の禪房よ

た。つら。く。い。く。ま。て。此。の。い。し。生。死。を。と。も。あ。れ。ば。後。世。に。と。の
強。く。は。し。源。空。を。為。申。た。く。結。ぶ。と。云。ふ。法。也。然。る。に
法。印。ニ。交。扱。つ。い。は。家。事。に。て。中。離。の。道。に。在。り。て。ハ
智。德。の。り。道。心。を。く。ま。り。は。せ。ん。定。め。て。安。立。の
美。い。ら。ん。と。申。さ。る。は。源。空。六。称。隨。此。本。願。よ。業。也。
極。樂。此。往。生。城。期。を。外。に。ま。す。と。知。ら。る。と。法。印
申。さ。る。や。心。存。も。か。れ。と。い。ふ。み。ま。を。う。も。は。り。は。り
て。思。案。を。か。く。せ。ん。う。た。め。に。為。申。と。い。は。り。但。ま
念。の。ま。を。ひ。に。ら。わ。け。ら。を。い。ふ。と。能。べ。き。は。上。人
乃。然。る。是。煩。惱。の。一。れ。為。た。れ。ん。凡。ま。れ。力。及。へ。ず。然。れ
と。本。願。を。受。く。名。号。を。唱。わ。れ。ん。佛。の。願。力。り
業。と。往。生。城。う。け。た。ま。り。と。法。印。信。心。安。定。一。疑

念ふらま代よらげぬ。往生はねようごひまひとて
退かき給るる

畫圖

○決擇門ハサル事ニテ出離ノ道ニラキテハトハ法門ノ是非ヲ
決シ邪正ヲエリ分ル方ハイカニモサル事ニテモアラスルガ出
離ノ道ハ又各別ノ義ナリトソ。サレハ決擇門ハ學解ノ分際ナリ。出
離ノ道ハ修行地ニ赴ク方ヲ云ナリ。○安立ハ施設建立ノ義也。○
老子經ハ「信言不美、美言不信、誑維摩」ハ二。肇曰、華飾美言
悦人意

○清水寺ハ山城國愛宕郡八坂郷ニアリ延暦十七年七月二日坂上田村麿其妻善高子ト共ニ心ヲ合セテ攘移シ私宅ヲ移シ

安置金也八尺千手像六丈同二十四年十月造改佛殿大同二年ニ慶シテ号清水寺也○沙弥印藏未考○能信ハ大系圖ニ贈左大臣濟時公十代之孫左馬頭信時朝臣之三男有已講能信新撰撰續千載集作者有能信

上人清水寺ありて説戒ははかどくに罪惡は九まれま
らも、本願をたのきて念佛を執り往生うたひなれば
ひひ、神んころよす、久ぬまひを執り、寺家の大勸進
沙弥官藏、ふく本願故信、ひひへ念佛は歸也、是
よよりて文治四年五月十五日、龍山寺を道場とせり

不断常行念佛三昧をん、久に能信といへる僧。
香爐をとりて、閑白發願して行道とらに。願主官
藏寺僧等、たごびよ比丘比丘尼をた、次結
縁し、ちりぞけ行い、まに退轉なり、阿弥陀堂の常行
念佛と号する是也。抑法名古に靈像ハ極樂浄土ハは
一生補處の薩埵、娑婆穢國ハは施無畏者ハ大士也。
仁和寺入道親王乃御夢想。觀音うつゝのそ
ゆり、清水寺ハ瀧ハ過去もも、此あり、現
えこもあり。未來もも、又、此あり、是則大日如
來の鍔字ハ智水なりとて、一首讚詠したまふ
清水の流すま、れをのつゝ、現世安穩、後生極樂

○俊縁一條
法眼記云。仁
和寺執行次
即坊今芝築
地並一條元
祖也云云

○説戒八圓
頓善離戒ノ
講説ナリ半
月ノ布薩ヲ
説戒ト云トハ
異ナリ

と云々。後鳥羽院御宇建久元年秋上。然
寺家へ作らる。此のたけを深う
念佛をさしめたるをよ。あなまの
念佛をさしめたるをよ。あなまの

畫圖

○清水寺説戒九卷傳。後鳥羽院御宇建久元年秋上。然
戒ヲ聞キ。信ヲ起シテ。文治四年不断念佛ヲ興行ストアリ。二年
後ノ建久元年ノ説戒ト云ハ。事定テ誤ナラシ。問大師既ニ雜行
ヲ捨テ。正行ニ歸シ給フ。而ルニ還テ弘ク戒ヲ勸メ給フ事ハ何ソ
ヤ。答凡ノ雜ヲ捨テ。正ニ歸スル事ヲ勸ムルハ。唯往生起行門ニ約シ
テ。以テ其安心ヲ論スル而已。若念佛ノ一行以テ生因トスルニ足ラ
スト疑テ。故ニ餘行ヲ加ルモノハ。復念佛ストイヘトモ名雜行人也。若
安心ヲ佛願ニ決シ去行ヲ持名ニ定ムルハ。縁ニ隨テ暫ク餘善
ヲ修ストイヘトモ。名ヲ雜行ノ入トスル事ヲ得ス。生因本期唯念佛
ニ在テ。餘行ニ在ラサルヲ以テ故ニ。是レ行ハ實ニ雜ナレトモ。人ハ必

シモ雜ナラサルユヘナリ。是知又能修ノ人ヲシテ。正雜ノ名ヲ被ラレ
ムル事ハ。本ト安心ノ引等起ニ分カル。敢テ刹那等起ノ行法ニ與ニハ
非ス。所謂但除其病。不除其法ト云者ナリ。問若其病ヲ除カハ。一
切ノ諸善志ニ雜修スヘキヤ。答然ラス。善ニ止ト行トアリ。行善ノ中
ニ。或ハ正業ヲ障ル者ノハ。皆ユレヲ捨テシム。縦ヒ病ヲ除クモ復修
スル事ヲ許サス。止善ハ此ニ異ナリ。若能ク病ヲ除カハ。修持ヲ妨ケ
ス。是往生ノ心行ヲシテ。專ニシテ復專ナラ令ント欲スレハナリ。問
信願決定セハ。豈雜善ノ為ニ心行ヲ導ケラレシヤ。而ニ強テ制スル
事ハ何ニ意ソヤ。答此ニ二ノ由アリ。一ニハ專無餘修故ニ。心ヲシテ純
一無雜ナラシムル。是ヲ無餘修ト名ツク。若正雜交修スル者ノハ。意
散漫シ易キカ故ニ。佛言。制之。一處莫事。不辨上。無餘ノ為修勸意
在茲。二ニハ專無間修故ニ。行ヲノ相續不断ナラシムル。是ヲ無間
修ト名ツク。若餘行弥精進ナレハ念佛間断シテ。淨業ヲシテ熟
シ難カラシム。佛言。一向專念無量壽佛ト。無間ノ為修勸意在茲。
問雜行類多シ。而ルニ大師所勸何。唯戒行ナルヤ。答持戒ハ是止善。
佛法ノ通儀。卻惡ノ先陣ニシテ。而モ能ク往生ノ行業ヲ助策ス。是
ヲ以テ勸持ス。道理應然耳。問幾ノ機類アツテ能ク淨戒ヲ持シ。何
等ノ機ノ為ニ且勸且誠乎。答念佛ノ人ニ凡有三根。其上善ノ者ノ

公或ハ他ノ勸ヲ藉ラス。自ラ能ク發心持戒シテ。精勤念佛ス。其下
愚ノ者ノハ。教誡ヲ聽クトイヘトモカ堪忍セズ。唯正見ニ住シテ。偏ニ
佛願ヲ信シテ。隨犯隨懺シテ。必往生ヲ得。其中根ノ人。持犯縁ニ隨
善惡友ニ依ル。一準スヘカラス。祖師ノ勸ムルところ。唯上中ノ根ニ在
若。其下愚ノ士女ハ。惟正見ヲ不壞則已。然ニ人アツテ戒ヲ執シテ
下愚ノ人ヲ抑制スルハ。實ニ是機ヲ誤ル。真ノ法師ニアラス。精シク
察セスハアルヘカラス。次ニ所勸ニ略シテ有六種。又所誡ニ略シテ
有四種。初ニ所勸ノ六トハ。一ニ持戒念佛順教機。是四輩ノ通儀。
約スルカ故ニ。二ニ持戒念佛助念機。是念佛ヲ助勸センカ為ノ故。
選擇集ニ明スカ如シ。三ニ持戒念佛助定機。是別時ノ行ヲ助ント
欲スルカ故ニ。觀念法門等ニ明スカ如シ。四ニ持戒念佛遮惡機。
是純善業成ヲ欲スルカ故ニ。選擇大綱等ニ明スカ如シ。五ニ持戒
念佛扶宗機。是宗ヲ光シ法ヲ護ント欲スルカ故ニ。六ニ持戒念佛
利生機。是譏ヲ息メ敬ヲ起サシメント欲スルカ故ニ。此二類者。專次
ニ所誡ノ四トハ。一ニ持戒念佛兼行機。是行兩端ニ分レテ。心ニ歸
セサルカ故ニ。二ニ持戒念佛雜行機。是如來ノ本願ニ違スルカ故
ニ。此人ハ唯戒行ヲ以テ生因トシ。念佛ヲ以テ助トスルナリ。三ニ持
戒念佛邪雜機。是自ラ誤リ他ヲ誤ツ。其罪甚重シ。此人破戒念佛
ノ往生ヲ許ササルカ故ニ。四ニ持戒念佛名利機。是異ヲ顯シ衆ヲ惑
ハス。劫盜ヨリモ罪アルカ故ニ。初ノ六機ハ並ニ持戒トイヘトモ。俱ニ是正
行ノ人ナリ。尚兼行ノ機ニ非ス。況ヤ雜行ノ人ナラシヤ。是ノ如キノ持戒
ハ。最モ勸讚スル所ナリ。次ノ四機ハ。邪正異ナリトイヘトモ。並ニ是誠
ムル所ナリ。○罪惡ノ凡夫等トハ。問破戒無戒ノ徒モ。唯念佛ニ憑テ
亦往生ヲ得シヤ。答法藏ノ本願於茲ニ超發シ。大師ノ此宗ヲ建
ツル事。唯斯一事ノ為ナリ。禪林十因云。我等若持戒精進者。何唯
恃彌陀。何偏欣極樂。為破戒懈怠。身貴十念往生。願之故也。夫以
レハ。念佛往生。本願ニ餘行ヲ誓ハス。繫念定生。激誓ニ戒行ヲ願セ
ス。是モテ知ヌ。淨土不思議ノ勝方便。專末法無戒愚惡ノ輩ノ為
ニスル事ヲ。是故ニ無量壽經ニ三輩ノ諸行ヲ説クニ。世尊獨標シ
テ一向專念無量壽佛ト言フ。觀經ニ三福九品ノ衆善ヲ説クニ。
如來唯念佛ヲ付屬シテ言ク。汝好持是語。持是語者。持無量壽佛
名。又阿彌陀經ニ恒沙ノ諸佛廣長舌讚スルニ。唯持名ノ一行ヲ證シ
タマフ。況ヤ夫ノ世尊ノ我慈悲哀愍ヲモテ獨此經ヲ留テ。法滅ノ
衆生ヲ度スル事百年ナラント言フヲ見ルニ。彼時ノ衆生豈能ク
持戒ナラシヤ。明カニ知ヌ。三佛ノ大悲。モハラ極惡ヲ濟ヲ以テ本懷
トシタマフ事ヲ。加之今時無智ノ士女。單信稱名ノ功ニ依テ。命終

○永万、二條院、年号、治承、高倉院、年号、其中間、十五年ヲ經、タリ

ノ時ニ臨ミテ歡喜シテ自ラ聖衆來迎スト云フモノ。都鄙ノ間見聞實ニ多シ。況ヤ眼ニ聖衆ヲ見テ口ニ言フ事アタハサルモノヲヤ。又甚フシテハ預死期ヲ知り、病無シテ終ルモノアリ。シカル其行狀ヲ見ルニ是持戒ニアラス。又禪慧アルニアラス。唯佛願ヲ信シテ其餘ヲ知ラサル者ナリ。奇ナル哉佛願イツクシソ思議スヘケン。○寺家ノ大勸進ト八園太曆記ニ。永万元年治承三年兩度ニ涉テ清水寺堂舎悉燒亡。建久四年修造之後供養アリ。是以桑門之勸進令修造トイヘリ。今ノ大勸進其桑門ノ隨一ナルニヤ。○龍山寺トハ音羽瀧ニ近キヲモテ名トセリ。今與ノ千手ノ邊ニ坐像五尺アリ。彌陀ヲ安シ。立像三尺餘ノニ菩薩ヲ安スル堂アリ。即龍山寺是ナリ。○阿彌陀堂ノ常行念佛トハ此念佛今ハ絶タリ。サレト念佛ノヒチリ此堂ヲ守テ臨時ノ勤行稱名ヲ事トス。○一生補處ハ是第十地ノ終等覺ノ薩埵ヲ云。此位佛ニ近フシテ其悟ウク又一重ヲ隔ツルカ如シ。本末。是ヲ一生ト名ツケタリ。終ニ佛ニカハリテ跡ヲ補ヒホトケ教化ノ處ヲニギハシ給フヲ補處ト云ナリ。大論。○施無畏者トハ施ニ三種アリ。財ト法ト無畏ト也。述記。菩薩ヨク衆生ノ苦ヲ救テ畏ナキ事ヲ施給フヲ施無畏者ト云。門品本。○八道親王トハ俗形ノ内ハヤ親王ノ宣下ヲ蒙給テ。後御出家アルヲ。八道親王ト云。釋門ニ入給テ以後始テ宣下アルヲ法親王トハ申ナリ。釋家官。仁和寺ハ覺性以後皆八道親王ナル由官班記ニ見エタリ。又此八道親王ハ三條院御子號大室寬弘八年十月五日立親王。御年七歲。俗名師明寬仁二年八月廿九日出家。法名性信。御年十四。大僧止濟信為師ト。具ニ後拾遺往生傳及釋書ニ見エテ。僧尼ノ部ニ注ス。○鑊字ノ智水トハ三種悉地軌云。鑊字即大日如來智海水大種子神通自在之法。名為智法身祕藏記鈔云。金剛界大日。以鑊一字為真言。又云。水必有息災能是有三由。一水消除不淨。二水鑊字為種子。鑊字離言說義。即是成寂靜。三水能滅火。世間衆苦熱惱如火。毘盧舍那智水能滅彼苦。皆息災義也。出石山息災護摩次第書。

○興福寺ハ大和國添上郡春日地ニアリ。昔時大織冠岳山城國宇治郡小野郷山階村陶原之家齊

南都興福寺ハ古年童ハ上人清水寺にて説戒乃時。念佛をす。免強をゆつて歸敬渴作れあまひ。厚くて發心出家して松苑寺に。かどりに菴城結く念佛し。靈瑞を感し。高聲念佛して往生候。

明天皇三年
二造管了多
山階寺或天
智天皇即位
八年。嫡室鏡
女王為大織
冠。建ラレトモ
云。後天武天
皇白鳳元年。
移大和國高
市郡。厩坂名。
厩坂寺。又元
明天皇和銅
三年。移春日
地。淡海公造
管了。改元
名。興福寺ト
号ス

とく。能信といふ僧。如法經にかうぞをうへあつ。往生人よ
縁を結んんふめに。棺のうらひ火に役をほめてくへ
に。異香衣れうへよ薰ど。人々奇特に思ひをみし。信
心をます者おやりを里

畫圖

○古年童ハ彼寺東金堂七日ノ行ヒノ時。手水湯ヲワカス者ナリ。此
役者ニナレハ。諸ノ公事ヲユルサレ。故ニ。望テ此衆ニ入。然間奈良
中ニ。古年童ト云者ア。マアルナリ。見。是興福寺ニ不限。諸寺ニ有之。
古年ハ代々ノ義。童ハ下僕ライヘリ。此役人今興福寺ニ一人有之。下
行米ヲトリテ。二季ノ神事。其外諸事ヲフレナカニスル役ナリ。大
方仕丁ト相似タリ。南都。又西金堂修二月ノ時。新堂童子ト号ス。上
湯ノ薪ノ餘。残ヲ薪火トシ。手水屋ノ内ニ於テ。四座藝能ヲ盡故ニ。
薪猿樂ト号ス。修二月ノ寄人。並ニ猿樂へ。古年童ヲモテ相觸シム。
春日若官拜殿神樂錢配分一口。古年童取之。今ニ至テ。毎年霜月
祭禮ニ猿樂江戸ヨリ誰々罷上候旨ヲ。衆徒中集會所へ古年童

來リ。專當ヲ以テ披露スルナリ。サテ衆徒中下行米ノ狀ヲ。古年
童ニ遣ストソ。衆徒舊記云。今般修二月依邂逅明德之比。不依修二
月有無。一七日於南大門薪之能令沙汰之。上中等可任意。古
年頭大允。四座猿樂中令相觸之條。不易之規式也。并若官拜殿
之白拍子。同娘御子。修二之寄人也。然間祭禮神事之時。西金堂
古年頭。白拍子。配分一口取之。書。○松苑寺九卷傳ニ。松蒙寺ト
アリ。地理定カナラス。今南都邊ニ。此寺ナシ

建仁二年三月十六日。上人語てのたまはく。慈眼房ハ
受戒の師範あるうへ。同宿して。衣食ハ二事一向。此
聖に扶持あり。然まも法門をこしく。習たる事ハ
なり。法門の義ハ水火にくお遠く。くよ。福後せ
なり。これ聖と源空とハ。南北よ。坊をあらへて住したり
しに。ある時聖に居し。まへる坊に。まへるに。聖に

備ひておれし御房也とよひ給へい。備りて縁よ居て
依と申に。大業の實智をおこして浄土よ往生してん
やこの終よ。往生し一徹ひあんと答申と記。なまのさは
見えざるぞやのなまふる。往生要集よ見えたる徹と
申よ。往生要集の中をえん給うら。どの終よ。いたま
申哉んごうやらんと申たれ。聖版立ち枕をのり
投おようち給へんや。うらよげて我坊の方へまうり
堂執をよふておりのく。さ乃柄をのり肩哉んら
れぞ。給ひま。又後よ文をよておりま。これいいた
いよ。えんごのまふ心の中よ無益なら。事れおれん。
いまは物申しと。誓言哉んらして。さういひ給へんと

○覺悟房未 考。

申たれん。又版立ちを執ら。極なる人を同宿したるハ
加極の事をよいひ合えん料よ。そをあれどの終ま。加
極のよ。は極よ。いさういさう。そを。寂後よ。覺悟
房といひ。聖よ。二字。哉んら。そ。うら。り。そ。序。ま。う。處。て。
坊舎聖教のゆはり文哉も。そ。い。讓渡と書れ。り。
を。り。ぬ。り。て。進上と書な。を。り。た。び。く。ま。と。世。と。よ。
た。い。よ。師弟と。な。ん。料。よ。申。ぞ。い。の。終。ま。

○アノ御房ヤトトハ。某ノ御房侯ヤトナリ。○ナニ、サハトハ。何ニカ
サヤウニハトナリ。○大乘ノ實智此智ノ起事。若權教ニ依ハ。初
地已上也。圓教ニハ。初住已上也。是ヨリ以下ノ位ハ。皆有漏有分別
ニシテ。真性ニ契ハサレ。假智ト名ク。具ニハ。唯識及天台玄義等ニ
廣明セリ。權ノ初地圓ノ初住ニ。始テ無漏智ヲ起シテ。無分別ニ
真如ヲ縁シテ。真實ニ境ノ法躰ニ相冥フ。是シ大乘ノ實智ト云

○重宴ハ山記ニ實地房
證真及重宴
同受密法於
穴太聖照
○迎接房委

○圓長ハ系
圖ニ參議巨
勢磨十三代
之後左衛門
佐尹通之孫
尹覺之次男
有定清僧正
附法權僧正
圓長号大貳
又顯季卿四
代之後右京
大夫長輔之
男有權僧正
圓長

○イサタレカ中ヲ見サルヤラントハイサハ万葉ニ不知ノ字。シラスト云
義ナリ。言心ハ我モ見タリ。師モ見給ヘリ。サテハ不知。タレカ中ヲ見
サルヤラント。源流章云。黒谷。巖空大德。傳持。此集成辨。浄業源
空。隨巖空學。此集得旨。彼要集中。引善導。玄義等文。因此。即尋善
導。所製。研窮精詳。乃以善導。而為所依。宗師。○ヤハラハスコレノ
コトヲ云。○ハ、キノ柄ヲモチテ肩ヲウチトハ。九卷傳ニハコフシヲ
ニキリテ上入ノセナカヲウチトヤリ。○云合セン料トハ料ハ物料
字。トテ。事ヲ辨スルノ用物ナリ。錢ヲハ料足用脚ナト云三同意ニ
テ。用意ヲ云。時ノ俗語ナリ。○最後ハ一書ニ。治承三年二月トイハ
知入更ニ詳ニスヘレ。○進上ト書ナラシテトハ九卷傳ニ。良久シクアリテヨ
ミカヘリテ。讓狀ヲコヒカヘレテ。進上ノ言ヲ加ヘテ。書ナラシテ讓ラレケ
リ。定テ冥途ニ沙汰ノ侍リケルカトソ。申アヒケリト

真言の師範あり。相換阿闍梨重宴之。寂後よハ受
戒。弟子よあつて戒をうけたまひま。あつて三部の
灌頂をうけたまひ。丹後の迎接房もつりて弟

子と知りて。顯宗ハ法門にひよ浄土の法門をい。源空
よ習てはわな。往生たけよ。當時ハ院主僧都圓長ハ
重宴阿闍梨ハ真言の弟子なれ。源空よハ同朋あり。
志ハあよ。ハ圓長真言ハ教相を重宴阿闍梨より問
ぬ。心よハおけゆ。あハ非學生にてえ云ひ。あ
ぬぞらよ。法然房よ問く。い。せ。く申さん。と重宴の
たまひま。ハ圓長も後よハ弟子よ。感。物。あ。ん。と。云
て。あ。く。受。戒。して。師。弟。あ。る。あ。ひ。あ。り。ま。寂。初
の師範ありし。姦作の觀覺得業も弟子にありて。源空
ハ戒師として受戒し。給。た。お。り。ハ。師。範。よ。ハ。弟。子。と。成
給。中。も。當時の碩学共の慈眼房ハ受戒の弟子

たすぬいあきつては師乃慈眼房のへりて弟子一歳
経る事不思議の事とておほゆきふとほく
るり経へんまきくへ皆隨喜し不思議の事なりと
え申あひた家

畫圖

○當時ノ院主ト八建仁二年ハ上人入寂ヨリ十二年ニナリ。此時僧都
西塔ノ院主ト聞エタリ。三塔ニ三ノ院主アリ。惠亮和尚ハ寶幢院第
一ノ院主タリ。其後延昌陽生教圓源暹等ニ三ノ院主ニ補セラレキ。
系釋家官班記云。惠亮西塔院主之始也。扶桑略記云。仁和二年七
月五日延曆寺西塔院主傳燈大法師位延最奏云。故先師贈法
印大和尚位寂澄創建此寺鎮護國家造藥師佛像安置東塔院
造釋迦佛像安置西塔院並充住持之主。仰為傳法之本。次師座
主傳燈大法師位圓澄受先師之付屬掌西塔院之佛事。延最謬
以非器忝繼末塵云。○當時ノ碩學共ノ慈眼房ノ受戒ノ弟子ナラ
又ハナキニト八九卷傳ニ。獻空ハ真言ト。大乘律トニラキテハ。當時
タクヒナキ英髦ナリト云テ。關梨皇相具シ。黒谷ノ室ニ至ルトアリ

○雲居寺ハ
花園ノ向ト祇
園ノ南ト云フ。
勝應院ハ即
此寺ノ本堂ヲ
号ト聞エタリ。
一書ニ。天治
二年七月十
九日慶雲居
寺一書ニ仁
明天皇承和
五年草創。一
書ニ此地天
台浄土宗ニ
テ舊ハ青塚
ノ地ニ在シト

左衛門志藤原宗貞。乃びは妻室惟宗の氏女。史婦
心誠一りて堂舎建立せ發願をせし。雲居寺ハ小
東の類よその地を志め。建仁元年四月十九日よ上棟
し。同二年春比其功とて終りけり。本尊ハ阿弥
陀の像脇土六觀音地藏を安置してまつ。同年の
妹ハ上人吉水の心房より。雲居寺ハ勝應弥勒
院へ百日系詣し。終り時願主宗貞門前よ躡居
て堂舎建立の旨趣をのべ。以供養あるべき中。後
申あひ。上人堂内よ入経く。佛像安置の躡を中
て。ま。此堂ハ源室ヲ供養すべき堂よあり。此
おれよ。た。願主その心をほとく周章すと

周章すと

ころよ。或人申て云。上人の勢至菩薩の垂跡は由り
ますと云ふ。人の口あるもの。志るに脇士り勢至菩
薩のまゝはるる。上人の心は遠くはる。然るに
これいふ。又勢至菩薩を造立し。これ地藏をハ
異所は渡したる。その跡は勢至菩薩は
居てまつり。後上人又雲居寺に集宿の時建仁
二年八月晦日。このて案内を申處よ。お遠く
供養城をげら。別の山啓由なり。たゞ念佛千遍
を唱へて。やと不斷念佛を始行せし。寺号は
引構寺とあり。この堂はまにあり。勢至菩薩の
うゝるよ。とへる。この地藏はなり。

畫圖

○惟宗ノ氏女トハ令宗惟宗朝宗忠宗等ノ氏姓氏録ニ見エタリ。女
標示スル所ナキ故。摠シテ氏ヲ以テ呼アラハストナリ。水鏡ニ光明
皇后御母橘公ノ氏ノ御為ニ西金堂ヲ建ト。東鑑ニ泰宗市河女子
藤原氏論シ申事アリト。百練抄ニ治承元年六月三日。清盛入道
僧都俊寛以下ノ輩ヲ召取。其中檢非使左衛門尉惟宗信房等
解官。後日ニ遠國配流ト今ノ氏ノ女若ハ此等ノ類族ナルニヤ。又宗
友ノ新修往生傳ニ藤原宗貞夢ニ三蓮華ヲ見ル。ハ自生スヘシ。一
ハ太上天皇。ハ惟宗清則亮左京カ所生ナリト示サレテ。臨終ニ瑞ア
テ。往生スト。サレト彼ハ保延元年ニ死スト云々。今ハ建仁元年トアリ。
時代遙ニ前後シス。同名異人。決シテ疑ナシ。○東北ノ類トハ説文云。
頰。面旁也。ワキト云心也。地理未詳。○勝應弥陀院ハ帝王編年記云。
永治元年七月十九日。瞻西上人於雲居寺。供養金色八丈大佛。號勝
應弥陀院是也。百練抄云。攝政忠通書額ト。具ニハ寺院ノ部ニ注セ
リ。昔ハ此像ヲ北京ノ大佛ト云テ。人々參籠シテ。奇瑞アラタ
ナル事多カリキ。竹谷乘願房ノ行跡第四十卷ニモ其事相見テ。決
疑鈔三云。德大寺唯蓮房參籠雲居寺。七日祈請。攝取之義。滿夜
夢中。本尊申手。握行者腕。動唇出聲。示現云。攝取是也。云云。夫木集

○唯蓮ハ奈
良ニ住ニ尼ナ

リト。長明ノ
發心集ニア
リ

澄月ヲ弥陀ノ三カホニナカムレハ雲井ル寺モ名ノ三ナリケリ○蹲
居ハウツクマリ井ルナリ蹲踞也。蹲踞獸直前足坐也宇慧琳瑜
伽護摩經音義ニハ蹲音存踞音據也。狐存坐ト和訓ニハツク井日本
或レリウタギト訓ス○周章ハアハテサハクナリ孔子家語云。出於
四門。周章遠望○引攝寺遺跡等未勘○コノ堂イニニアリトハ應
仁ノ乱ニ雲居寺ト同時ニ兵火ニ亡ケルニヤ今ハ跡サヘ知人モナシ

卷十三終

圓光大師行狀畫圖翼贊卷十四

事義

傳本第十四

○權僧正顯
真ハ前美作
守藤原顯能
之息母ハ參
儀爲隆之如
也。師主最雲
親王。堀川院
子。明雲大
井宮。入室相
實法印。灌頂
弟子也。
○承安三年、
高倉院即位
五年。安元二
年。同帝即位
八年也。

天台座主權僧正顯真いすむ大僧都よておあまし記
兼安三年生年四十三の官職を辞し菩提を求む。
大原の龍居の春殊の四箇年より及び安元二年
七月八日に建春門院崩御の有る。此の以て菩提の為す。法住
寺に新法華堂を立たせり。此の以て忌を迎へ。同八月
廿五日に行法をくし。此の先達の。叡山
法花堂に一和尚位を覺房真惠をめし。此の以ては
勅定の。時に大原の僧都に代り。此の以ては



續藏 卷十四

○法住寺ハ拾芥抄法住寺法性寺北百練抄蓮華王院東法華堂
 ○山ノ法華堂公在止觀阮西海法華二昧及四季懺法此ニテ行入
 ○正覺房真惠行實未詳山僧記此房号應非住房稱是法華堂衆故
 ○禪光房顯明山僧記云未考

御宿願の事侍り。まづく入衆あるべし。堂中
 よゆれをくわく後同九月一日子に越よ登山。則系
 堂して一衆を列し。膺次よまをせ。二床に二和尚よ著
 し。翌の越一時はと先罷きて後一床の一和尚よいさ
 なるひぬ。其後、禪先房顯明を代官らる。三大師天台傳教慈覺
 の以忌日以下大小の課役等みな新入のこく勤仕を
 せぬ。四季懺法は初夜の時より。たゞの系堂し。然ひ
 き。是則出離は道たやとが。たゞの事法をたて。名利
 の学道はのれ。沈居はた。いも。定出離は直路。思案
 いまこ。一変を。昼夜よ。此事をのま。たげく處よ。十二禪
 衆の闕を聞と。い。乃半行半坐は行法。天台大師御筆

乃法華經を本尊として傳教大師弘仁三年七月よ
 草創したる要行なり。これ生死解脱の直路たるべ
 し。と。これひより。十二禪衆を列し。然り。毎日
 毎時の法とあり。懺法一卷はくく。修する事。の
 う。此僧都ら。めを。ま。う。ハ。一衆同心して。これ行
 いまにを。く。ん。ん。

畫圖

○大僧都ニオハセシトキトハ座主記云。壽永二年九月日吉御幸
 之時叙法印而不從事。建久元年三月七日依衆徒請勅使臨大
 原補座主職第六十一世。五月廿八日任權僧正。二年六月十三日辭
 職不許。○承安三年生年四十三。ニシテ官職ヲ辭シトハ座主記同之。
 ○建春門院。後白河院ノ御后高倉院ノ御母ナリ。帝王編年記ニ。
 嘉應元年四月十二日系圖。院號安元二年七月八日崩。御年
 三十五。百練抄云。安元元年五月廿七日建春門院百箇日御懺

法結願被免輕犯者自去比。上皇於蓮華王院限百箇日有御施行每日米其三十石其次有出家之志者各剃頭男女已及百餘人各賜衣一領又云安元二年六月十八日被行非常赦依建春門院御惱卅日贈左大臣有託宣仍為訪被菩提十樂院墓所立精舍今日上棟七月八日崩御上皇白御歎息葬新法華堂平生所被造營但未作事等臨期終其功八月廿五日事成御供養也○カノ關上空官ヲ闕ト云ナリ白氏文集六十二臺官空不知所取省郎闕不知所求ナトアテ其役人ノカケタル云ナリ巖山法華堂ノ役人真慧出京ノ跡ヲ望ニルトソ○シハラクハ衆アルヘカラサルヨシ堂中ニラレククリト八宿願ニ任セテ自勤ムケレハシ餘衆ヲ加給ハザレトテ堂衆中へ案内セラレシナリ此比山門諸堂ニ堂衆ト云モノアリテ諸堂ノ勤ヲ自由ニシテ衆徒ノイロハ又事ニテアリケルトナン第二十六卷ニアリ○ニ床ニ和尚等ト八音ノ法華堂敷瓦ナレハ勤行ノ時床ヲ設テ坐ス其薦次第ニノ和尚ニ相當シケレハ第二床ニ著シテニ和尚ナリシトソ一床一和尚ト云モコレニ準スヘシ是山家者之推臈天訖而未詳臈天ハ第十卷ニ注シス○顯明ヲ代官トシテ等ト八法華堂ノ參勤ハ自ラツトメラレ御忌日以下ノ課役代官ラシテ勤ラル天台八十一月廿四日傳教八六月四日慈覺八正月十四日ヲ御忌日トス三四年大原ニ

籠居シテ課役等中絶シヌ今更勤仕セラル事新參ニ相似タレハ新入ノ如シトイヘリ○四季ノ懺法傳教大師弘仁三年七月立法華堂始修法華三昧及四季懺法紀舊ト○十二禪衆ノ闕ヲ聞トキ等トハ彼堂ノ一和尚正覺房勅請ニ赴キケレハ十二禪衆ノ一ヲカケリ此闕ヲキクニ催サレテ此要行コソ解脱ノ直路ナレト此時ニ思ヒヨリテ十二禪衆ニ列シ給ヘルトソ半行半座四種三昧ノ隨一ソノ第三ナリ方等云旋百二十巾御坐思惟法華云其人若行若立讀誦此經是人若坐思惟此經止觀二續本朝文粹云天台山法華三昧堂者傳教大師之所經始也法鼓法螺六時之勤無虧半行半坐三昧之誠不還云云盛衰記此行法又以彌陀為法門主釋給然レハ彌陀ノ名字ナケレトモ○唱ヘ心ニ念スヘシ先ヨリ西方ニ向テ坐セシム何ソ餘方ノ佛ヲ念セン雜談ナト見エタレハ出離ノ要路トハ思ヒヨラレケ卅創論語ノ字ナリ正義初始之義也ト○懺法一卷トハ法華三昧行道誦經時一部通利則一部全誦乃至一卷一品隨記憶多少行者意樂隨誦之也元慶二年慈覺大師命徒誦安樂行品以為定式今法華懺法是也記

其後八箇年八箇年ハ歲曆改すきテ壽永二年九月日吉

○壽永二年
安徳天皇即

位三年也

○座主明雲

村上天皇第

七皇子具平

親王六世後

久我大納言

顯通卿之息

最雲親王相

實法印灌頂

弟子梶井門

主一世也仁

安二年二月

十五日任天

台座主

○相模房事

實味詳

の御幸此時座主明雲乃賞哉ゆづりて法下に叙せる
 るといへどもかく松門をさざりひるりに蓬屋り居
 しくさるゝたゞ生死れおぼるま事のさ
 げく同し法流をく免るりとてはひに永く辨る
 法下にお離れ道はくりあらせ給りくれまさの
 事に法然上人よい尋あるたれ由を永く辨申するには
 こそ相模房と云者哉使者とくく登山の便也
 こそ法音信と免給也申するゆえま事はゆり
 信はれる事を上人坂本へ送り給くと申され
 たり法下ありまあひく對面しこれはひくして
 生死をもあれ給るま事のゆえ上人いゆえはゆり
 ひよはまくゆりと法下申すれはまいはん達に
 まあはまん定めて思定め給はる旨ありん志あり
 たまとありとの給へん上人自身の為はいさくく
 思定める旨はたまやく極樂代往生は給らげ給
 へと申すれはまい法下順次乃往生とまる給り記
 へんこれ尋はりすいくまくこれいびをやとく
 往生はまる旨まやとの給ふ時上人答はり給り成成
 佛いくといくといくと往生は得やと道綿善導の心
 むれ佛の願力を強縁として乱想の九丈淨土
 り往生すと

○官ニ進ムラ任トイヒ位ニ昇ラ叙ト云今ノ文相座主記同之上ニ法下ス

○文治二年公
後高羽院即
位三年丙午
歲也

○勝林院此
院魚山大原
寺一号ス今尚
四房アリ法
泉房普賢院
理覺房實光
房ナリ坐像文
六ノ跡也

トレ等テ夫
六堂トス是佛
工康尚ガ刻
彫アリト或定
朝法橋父康
ノ命ツ米 作
下云是即長
和二年三寂源
法師此院ヲ
所創ニ安ス
此所ナリ

かこのごとく此をなすに當りて。このごとく
いざしく百日のる大原に寓居して浄土の章疏を
披閱すは、いざしくのらすでり浄土の法門をこそ見
立傳ゆ。此來條して談ぜしめ給へと伝ら此り
也。此を文治二年煉のつ詔。上人、大原へ渡り給ぬ。東
大寺の大勸進俊宗房重源いも、出離れ道成りし
定めざりき。其哀を給て。二由、城告伝ら此りき。是
弟子三十餘人を相々して大原にひり。勝林院
の丈六堂よ會合と。上人の方よ。重源以下此弟子
どもそのつどつた。此に法を此方よ。門徒以下の碩
学。いざしく大原に聖達せり。此に法を。山門の衆徒

をとりめて、見聞の人おのりき。論談徒徒と
事一日一夜あり。上人法相三論華嚴法華真言佛心
等乃諸宗よわたりて。九丈の初心より佛果に極位
よいたすまで。修行の方軌得度の相由はぶ。このべ
給て是等此法の義理わく利益と。此り機法
相應せば得脱くびと。返也。す。是。源空
こと此の頑愚れ。い。更り。その器にあらざるゆ
へ。は。り。が。く。ま。ご。ひ。を。と。り。さ。る。百。源。空。發。心。れ
後聖道門の諸宗より法をて。ひろく。離れ道を
と。あ。ぬ。よ。か。ま。も。か。く。こ。れ。を。か。く。是。則。世。を。り
人をろりて。機教あひ。こ。ひ。く。ゆ。へ。なり。さ。る。返。善

事見三釋書云顯真靜嚴明遍證真公胤皆緇林之翹楚也從空十五問專念之道沙石集二大原ノ談義ハ如法ノ後世ノ學問ノ談義ナリ
タリ一書ニ大原ノ席ニ集ル人三百餘人或ハ偏執ノ輩モアリ或ハ眞ニ
道ヲ歎給フヤカラモアリトイヘリ良ニ羣衆ノ中ニ慢執ノ人モアルケ
レドツレハ此席ニ來ノ本意ナラ子ハ云ニ足スサレハ問答往復ヲ經テ出離
ノ要道ヲ決シ往生ノ門ヲ開カレシニ信ヲオコレ縁ヲムスフ人ナトスクナカ
ラシヤ世ニ傳フ能谷入道此席ニ向テ上人ヲ警固申セシト此説信スルニ
足ラス此入道ノ出家セシハ建久四年ノ事ナリ此問答ハ八箇年以前ノ
事ナリ能谷直實ハ文治元し巳年ヨリ八箇年ノ間所領ニツキテ熊
谷ニアリ建久三壬子年十一月廿五日武藏國熊谷久下ノ境ニツ
キテ相論ス同四年三月遂ニ古郷ヲ出テ吉水ノ御庵室ニ參リテ出
家受戒セリ

法道心うちらにをらしてお離の要路をもとめ
我をさる上への諷諫を得たて後たらし余行
を指せて一向專修の行者とならば自ら自身に

○姨ノ禪尼犬原問答縁起
三妹トスル者
素圖伯母ハ
人アリ然レハ別
度ノ人ハ見テ妹
一人アリテ中
納言雅教卿
ノ室ナリ雅教
卿第三ノ女ハ
大納言實長
卿ノ室也離別
ノ後出家スト云
リ是ハ妹ノ娘
ニテ座主ニハ嫌
アリ
○易判卦云
君子尚消息
盈虛豐卦云
天地盈虛與
時消息注消
息謂

出離いとて念佛往生いのそにあらすあま
少く又他人をすめり我の禪尼をすめんといふ
念佛勸進の消息をいふは世間ニ流布して願真
の消息と号するまじわその詞云

○要路ハ肝要ノ徑路也○諷諫ハ異見諫言ナト云ニ同レ何トナク物
ニヨソヘテ異見スルヲ云ナリ漢ノ王式カ詩諫ノ類ナリ詩經三百篇モ
亦皆諷諫ナリトフ韋孟カ諷諫詩序ニ戊荒弊不遵道作詩諷諫ト
○消息ハ易ノ字ナリ莊老ノ書ニモ往々ニ見エテ陰陽往來ノ事ヲ云リ
此二字アリケレ日本トモ訓レタリ思フコト文體ニ書アラハレテ互ニ
往來スルヲ消息ト云ナリ文選ノ李善カ注ニ見エタリ塔囊孝謙天皇
寶龜七年三月進唐國消息并在唐我使藤原朝臣河清等書續
本亦有親情滿故鄉潛來變不通消息白氏文ナトアテ皆書狀ノ
事ヲ云字彙ニ消息音信也ト

念佛を念とせし佛我を照し自ら光明我をて

○李善云消言往也事既往故消息言乘也使無所乘故曰息也

○真如堂縁起三如来田中ノ禅尼ニ示シ給御歌トキスキテ益ナキノリヲ捨ヨカニ五劫思惟ハ誰カタメノモ

れせし。罪障もえ消しよとて。藥王樹よぬくまのい毒たれどもをとりとたる。光法かうみんもれ。あつれつ罪障れのらりあらん。くごのわやもれ行は無數劫のあひ思ふ。あがりきる。わしよ時過。家智惠禅定を修せんよらも利益現在なる光明名号。汝稱念すべし。一行とれいら一切行あまひ念佛の一行よ。諸行あまひくをなまはせし。一念もれいら無量念たれし。一稱弥陀あよ乃不足。あらん法界宮よ。んとなまひ。極樂の東門よりいれ法身軀を證せん。とらりん。弥陀乃名号汝となふべし。道綽ハ講説。汝とてく一向よ念佛よれり。善導ハ難行をまきひ

て專修をすし。占畧林よ入ぬれい餘香汝を清。各の室よ入ぬまひ。功德の香をのまぐ。あまのいん人い。あま念佛の香。汝のまき。念佛れあをのまき。ことになり。あま。取詮。文治二年十二月廿九日。護摩堂尼の前へ。法王專修の身とれり。念佛を行。ろ。法王。この消息よ明くわ

○藥王樹ハ六十華嚴三十七入法界品云。譬如善見藥王。滅一切病。此樹ヲ起世經ニ。勿利天ニ在トイヒ。涅槃經ニ。雪山ニアリト云リ。觀音玄云。有藥王樹。根莖枝葉皆能愈病。聞香觸身無不得益。如華嚴說。○時スキタル智慧禅定利益現在ナル光明名号ト云安樂集。大集月藏經ヲ引テ云。佛滅度後第一五百年。學慧得堅固。第二五百年。學定得堅固。第三五百年。學多聞讀誦得堅固。第四五百年。造立塔寺。修福懺悔得堅固。第五五百年。白法隱滯。多有諍訟。微有善法得堅固。又彼經云。諸佛出世有四種法度衆生。一。口說十

二部經ニ有無量光明相好三無量德用神通變化四無量名號
稱念除障計今時衆生即當佛去世第四五百年正是懺悔修福
應稱佛名號時者略○一行スナハチ一切行一念スナハチ無量念トハ
此趣ハ日比習ハレタル天台ノ法門ニヨセテ淨土ノ法門ヲスメラル。是即
彼宗ニ談スル所ノ相即ノ深理ナリ。大師ノ趣ガクト云ニハアラ子ト座主
ノ姨御前ニテ渡ラセ給ケレハ日比カヤウノ法門ヲモ聞ナレ給ラサレハ一
機一緣ノ爲ニ仰告ラレケン。彼法本房成覺房ナトノ加様ノ法門ニ事
ヨセテ一念義ヲ建立シテ是スナハチ大師ノ御素意ナドイヒシ佛
卷十九ニハ同シカラシレ○大日經云法界宮大日以法界爲道場沙石
集ニ云ク彌勒ハ胎藏ノ大日彌陀ハ金剛ノ大日ト習事アリト云
故ニ極樂ハ彼宮ノ初門ナルヘシ○法身體ヲ證セントオモハ彌陀ノ名
号ヲトナフヘシトハ大日彌陀異名一體密嚴極樂異名一所ト云ハ密
家ノ常ノ所談ナリ。此二節言異ニシテ意同シ。法界宮法身體トモニ
寂光普遍ノ妙性。法身毘盧舍那ノ理體ヲ指テ云ナリ。蓋是得生已
後ノ入證ヲ云ノミ○道綽ノ講説ハ唐高僧傳ニ涅槃經ヲ講スルヲ常ノ
所作トシテ二十四遍ニ及トイヘリ○占畠ハ香華ナリ。天竺ニアリテ其
香遠薰トイヘリ。大論ニ此方ニハ黃色華或ハ金色華ト云ト。名義集ニ
詳ナリ○淨名ノ室ハ淨名經云香積作國以香爲佛事樓閣華園皆
香或經行處皆香乃至鉢飯普熏比耶云○ニノ山トハ法印ノ所住
大原山ヲ指テ云ナリ

又十二人の衆を定めをきて文治三年正月十五日より。
勝林院よ不斷念佛をんぐん久をこなりれに。法常ハ
十二人の随一として。成尅をぞけられる。開向れ
夜ハ十二人皆集行道して同音ハ念佛を修むる
又毘沙門天王列よ立給へるを法常まれあたわ
拜しをほひて良忍上人の融通念佛ハ鞍馬寺
ハ毘沙門天王くうたまひあはえ諸天善神を
すめ入給ひま家を思念せしれいよく信心を
まり貴くおほまれ念佛守護の為り。毘沙
門天王ハ當室のうらに安置せれまり

畫圖

○天治元年
崇徳院即位
ノ年也

○天承二年
同帝即位九
年也

○長和二年
三條院即位
二年也

○釋書良忍傳云。一日異人來謁言曰。師蓋唱融通念佛乎。忍曰。何謂對曰。迴我所唱融會衆人衆人之唱。又通于我。是融通念佛也。ト云。今考ルニ良忍上人。生年四十六。夏ノ比ヲ河彌陀佛ノ示現ニ依テ天治元年六月九日ヨリ始テ聚落ニ出テ此行法ヲ弘給ヒシ。鞍馬寺ノ毘沙門天王。大原ノ艸菴ニ化現シテ勸化ノ名帳ニ入給テ。此法ヲ守護セントノ給ヘリ。同二年四月四日古今著開天承二年正月四日鞍馬寺ニ參籠シテト口ニ給ヘルニ夫王ツケテノ給ハク。上人ノス。佛神ノ冥慮ニカナヒテ悦給ヘリ。我又御ス。メニ侍リヌ。サレハ我此法ヲ傳テ諸天ヲス。メ日本ノ神祇ア。メタ是ヲ授カリ給ヘルナリ。我勸ル所ノ人數此帳ニ注シストテ。上人ニ渡サルト見テ夢ハ覺ヌ。ウツ。ニ傍ヲ見給ヘ。果シテ其帳御ソハニアリケルトナシ。縁起ニ注セリ。古今著開天承二年正月四日天王ヨリ授カリ給ヘル勸進帳モ今ナヲ南坊ニ傳ハリテ現在セルトカヤ。ソノ寫世ニ弘マリテ間ニアリ。當時モ念佛百遍授カリテ。彼帳ニ名ヲシルサレ。諸天善神ノ列衆ノ數ニイルトツ。著聞ニ凡勸進帳ニ入トコロノ人三千二百八十二人ノ内。時日ヲ注シテ往生ヲ遂タル者六十八人也。トイヘリ。○當室ニ安置セラルルハ昔長和二年寂源法師。此院ヲ艸創シテ念佛行道シケル。一日毗沙門天王。蓋ヲ執テ後ニ隨ヒ給ヘリ。其天降ノ室今尚存。釋トイヘリ。今丈六堂ニ天王ノ尊像儼然トシテ立給ヘル。座主ノ安スルナリトツ

○池上皇慶
釋書云。皇慶
姓橘氏。黃門
侍郎廣相之
曾孫。性空法
師之姪也。甫
七歲。登齋也。
從東塔院靜
真學。祕密宗
慈覺七代嫡
嗣也。就景雲
阿闍梨。探東
寺密傳。雲器
乏悉付。祕奧
并授弘法大

法王ノ大願をたてしむ。これ寺に五坊をたてて。一向稱名を相續して。餘行をまじはらじ。その願じぬ。池上ノ阿闍梨皇慶ノ舊跡ニ護法守護ル靈地ノ五坊をまじ。楞嚴院安樂の谷。法王ノ新安樂と号し。性智房。鏡智房。妙智房。佛智房。勝智房とぞ。其地々々。その行法いまに退轉。我時大佛の上人俊乘房。又一の意樂。我國の道俗。炎魔王宮ノ名字。阿彌陀佛号を唱へしめん。阿彌陀

○寂光大師
御廟、當時廢
絶セリ。四塔東
谷、寂光院ト
号スル僧房ハ
此、大師所住
ノ處ナリトシ、太
師ハ傳教大師
ノ方、圓澄和
尚是也。
○傳教大師
御廟、東谷ニ
アリ
○法華堂ハ
在止觀院西
弘仁三年七
月傳教大師
歿山、建法華
堂、此處毎夜
有誦安樂行
品之音、即堀
其地、髑髏赤

正（まこと）ノ拜任（まがら）ト。治山（ちやま）三箇年（さんかんと）の向内（むかうない）論義（ろんぎ）二箇度（にかた）寂光（じくくわう）大師（だいし）ハ御廟（ごまう）の番論（ばんろん）義傳（ぎでん）教大師（けうだいし）の御廟（ごまう）淨土院（じやうどゐん）の番論（ばんろん）義（ぎ）ナリト。取（と）をこたはれども、吾山（ごやま）の佛法（ぶつぽふ）ハ、えをさるゝ故（ゆゑ）ハ、まじきと。たたらを、おこはれ、かども。まじき、まじき。稱名（ねいめい）ハ、行業（ごうごう）をこたはれ、法華堂（ほふわだう）ハ、初夜（しよや）ハ、行法（ぎやうぽう）ハ、高聲（かうせい）念佛（にぶつ）千遍（せんぺん）をくゞ、修（しゆ）セリ。まじき。まじき。行（ぎやう）ハ、まじき。退轉（たいてん）ハ、まじき。

○最勝講。公事根元ニ先カ子テ日次ヲ定ラル。四箇ノ大寺ノ（東大延曆興福園城）僧ノ事ニ稽古ノ聞エアルヲエラヒテ定ム。證義講師聽衆ナトアリ。最勝王經ヲ清涼殿ニテ講セラル。ナリ。其儀式ナトハ注スニ不及。事一條院御宇、寛弘ノ比ヨリハシメル。長保四年ヨリハシメルトモ申也。後朱雀院ノ時ニヤ。生身ノ四天王道場ニ現セサセ給ケルヨリ、必四天王ノ座ヲレカレ侍也。五日ノ間ノ儀式。日毎ニオナシ。結願ノ日。行香ノ祿旨ヘシト。又正月八日ヨリ

吾具也。仍其處建シテラルト。長保四年ハ壬寅歲、寛弘元年ハ甲辰歲也。

十四日ニテ最勝王經ヲ講セラル。事アリ。ソレハ正月御齋會トテ。大極殿ニテ行ハル。ナリ。今此講ハ五月ノ事ナリ。證義トハ難答ノ趣ヲ證明ハ役ナリ。大平記ニ證義論談ヲ決擇シテ。詞ノ林ニ華開クナトイヘリ。釋家官班記曰。其役公庭之御願。公請之先途。偏在此事也。仍四箇寺之輩互爭鋒。御願講師參勤之度。爲第一之功勞。其役參勤之次第多分先參法勝寺。御八講。然而又隨機嫌。雖非殊。抽賞之器。用最勝講之外。更不莅他御願。又細々御八講等。證義先有被仰之輩。此條大段此役勅許之上。事之先爲講師之人。數勤證義役。稱之。號兼講師。極官（僧）正以後。一向勤證義役。稱之。爲平座儀式。以下ノ間ノ事ハ江次第夕拜至要ナトニ具ナリ。○内論義公事根元二十四日。正ハ御齋會ノ結願也。内論義ハ御殿ニテ行ハル。御物忌ノ時ハ南殿ニテアリ。問者講師ナト有テ。御前ニテ論義スレハ内義トハ申ナリ。孝徳天皇白雉三年四月ニ惠隱沙門ヲ内論義ニメサシテ。無量壽經ヲ講セラル。沙門惠隱ヲ論義者トシテ。一千人ノ沙門ヲ聽衆タリト。日本紀ニシルセリ。又天長十年正月廿四日。延曆寺ノ僧圓澄ヲ召テ。論義アリト云エタリ。是ナトヤ事ノ發トモ申ヘカラント。（釋書ニ惠隱ノ講經ヲ記シテ。是宮講ノ始ト云。三代實錄ハ）二引名僧奉參内裏。論義如常。釋書資治表ニ弘仁四年正月御齋會置内論義（帝王編年記）ト。又釋書慶祜傳ニ橫川寛印三井定基爲

○座主記。行年六十ニトアリ。圓融房ハ東塔南谷ナリ。第三十六代
座主良眞法印ヲ圓融房ト号ス。今ナラ存シテ梶井宮ノ房跡ナリ。○
英辨ハ禮記ノ注疏ニ倍千人。曰英倍英。曰賢萬人。曰傑倍傑。曰聖ト
○僧正ツ子ニノタニヒケルトハ僧正出離ノ志渡カリケレハ萬ノ善行ト
事モ殘サジト勵メレケシメ今ハ只念佛ノ一行ハカリヲ憑ミツルカナト覺
東ナカリシニヤウヤク行ツモリ。功ス。コレテ初ノ心ニハ似スナリヌトク蓋
決定往生ノ安心極マリタレハニヤサテカクゾノ給ヒケル

